

2013年 第15回 東京学芸大学  
**ホームカミングデー**  
 辟雍会創立10周年記念特別講演会  
 日付:2013年11月2日(土)  
 時間:16:00~17:30(15:30開場)  
 場所:東京学芸大学芸術館(学長501号)  
 講演「これまでの教育・これからの教育」  
 ～我が家族史から思う個人・家庭・社会～  
 講師:北野 大氏

# 第10号

## 辟雍会設立10周年記念号



# 辟雍 10号 目次

社会の深部からの課題に全面的に応えていこう 鷺山恭彦	4
北京に中国留学生大集合	8
椿真智子留学生センター長に聞く	16
座談会 辟雍会はなぜ どのようにして設立されたか	18
「辟雍」創刊号の特集を再録する	24
あの年はアテネオリンピックだった	24
栗山日本ハム監督は：日本野球チームを真近で応援した	29
2013年の栗山英樹氏にインタビュー	30
支部からの活動報告	
群馬・北海道・青森・新潟・千葉・神奈川	
・山梨・静岡・富山・岡山・鳥取・島根・高知	32
各部活動報告	48
鷺山会長の10周年記念インタビュー	
学問への憧れ、教育への想い	
——有馬朗人元東大総長・文部大臣に聞く	50
「会長室から」	
グローバルゼーションと学びの質の転換	
——三村明夫中央教育審議会会長に聞く	60
辟雍会10年の歩み	68
第15回ホームカミングデー	72
編集後記	73



右の題字「辟雍」は、中国・蘇州大学の書道教授・朱剛さん（上写真）の作品です。朱剛さんは二〇〇一年から〇三年にかけて美術教育書道科大学院に留学された東京芸科大学同窓生です。八月の「北京聚会」でお会いした折に「十周年記念号の題字を」とお願いしたところ快諾してくださりました。



## 「辟雍」殿

中国・北京にある「辟雍」殿です。この建物は清朝の時代、乾隆四十八年（一七八三）に「国子監」という貴族や官僚の子弟を教育する施設、また皇帝の学問の場として建てられたものです。周囲には新鮮な水が巡らされ、清潔で美しい環境だったと言います。「国子監」は、最初は長安の都にあったものですが、北京には

元、明、清の三代にわたっておかれました。

この建築物は全国重点文物保护单位となっており、建物のある東城区のこの通りは「国子監街」と名付けられ、二〇一〇年に第一回「中国歴史文化名街」の一つに選定されました。

（樗真智子留学生センター長撮影）



# 社会の深部からの課題に

## 全面的に对应していく

### 辟雍会会長 鷺山恭彦

#### 十年の歳月

創立十周年を迎え、辟雍会も在校生、卒業生を合わせると、一万人の会員を擁するまでに発展した。初代会長の荒尾禎秀さん、二代目会長の長谷川貞夫さんはじめ、活動を中心的に担って下さった役員の方々、そして会員の皆さんのおかげである。

さまざまな感慨と共に思いだされるのは、数学科教授の池田義人さんのことである。夢とアイデアいっぱいの方で、辟雍会をつくる実質的な牽引車となり、幹事長として活躍されたが、残念なことに創立二年目に急逝されてしまった。お元氣なら、今の辟雍会をどのように見られるだろうか。

区切りの年を迎えたが、組織的にも、取り組む課題の上でも、発展途上のさまざまな問題に直面している。

#### 支部の拡大

辟雍会支部は、まだ全都道府県にできていない。現在活動しているのは、北海道、青森、岩手、群馬、千葉、神奈川、山梨、静岡、富山、石川、鳥根、鳥取、岡山、広島、高知、鹿児島、沖縄の各支部である。そして新たに、埼玉、宮崎、佐賀、熊本、大分に支部を作ろうという動きがあり、出来れば今年度中の結成をめざしている。京都、大

阪、奈良、和歌山、兵庫、滋賀は、まず近畿支部として、この秋、動き出そうとしている。

このように各県に同窓会が設立されつつあるが、入学と共に会費を納入して会員となる若い世代と違って、旧卒業生の結集は一千人とどまっている。卒業生は全体で六万人といわれている。是非、多くの皆さんに結集していただき、豊かな交流を持ちたいものである。

それぞれの県に何って、卒業生の皆さんとお会いすると、実に多彩な活動を展開されていて、そこから醸し出される地域の香りに、深く魅せられる。

教員として奮闘されている方が多いが、ジャーナリズム関係、公共団体関係、企業関係、会社経営、芸術家など、多士済々で、学芸大の懐の深さを実感する。そういう方々からは、大学や学校からだけでは見えない、教育の問題や、社会の動きが何えて、新しい知見を触発させられる。

こうした貴重な体験を是非とも共有したい、ここから生まれた経験のエキスを日本の教育の羅針盤として活用したいものである。



## 北京での集い

こうした中で、今夏、新しい動きがあった。総合社会システム専攻出身で、中国の大連みずほ銀行に勤めている安迪さんの尽力で、本学に留学した中国の各地にいる卒業生たちが、北京に集まったのである。

企業で、出版社で、大学でと、様々な分野で活躍している皆さんが五十名も集まり、十年ぶり、あるいは卒業以来の再会とのことで大変充実した同窓会となった。

外国に行くと、普段は感じない人類性というものを強く意識させられる。「個としての人間は有限だが、類としての人間は無限である」——人間はこの類的存在であるがゆえに、多彩で、無限に伸びゆく存在に成れるのだ、と。

学生時代、感銘を受けたドイツの哲学者・フョイエルバッハの言葉であるが、あらためて北京で、人間存在の多彩さと無限の可能性を実感した。

緑豊かな学芸大キャンパスに想いを馳せつつ語る卒業留学生たちの会話を聞いていると、各個人のもつ人間的魅力と諸能力の全面的解放を夢想したこの言葉は、まさに教育の本質を示す言葉でもあると思った。

## 学校教育の課題

日本と中国を股にかけて活躍する中国留学生の卒業生たちと

話していると、グローバル社会の到来をひしひしと感ずる。

グローバル化に対応する教員は、大学も含め、どのような資質能力が求められるのだろうか。多文化共生というが、それぞれの国への理解、言葉へのセンス、共同の在り方など、開拓すべき課題は多い。

教育現場ではこれから、経験ある教員の退職が続くという。十年間で教員の三分の一が替わり、経験不足教員が増え、少数の多忙な中堅教員と、新しい時代の学校運営に十分習熟しない管理職が生まれる懸念も指摘されている。

実践的指導力として、教科の力はもとより、「コミュニケーション能力、チーム対応力、組織的で計画的なリーダーシップとマネジメント能力、等々の向上が言われている。

児童・生徒の側でも、依然として課題は多い。「早寝・早起き・朝ご飯」、「読書・手伝い・外遊び」と生活規範を作りながら、生きる力を育む努力が続けられている。しかし、いじめは四万件に減ったといわれたものが実際は十四万件あったとか、不登校も小学校二万件に対して中学校は十万件を超え、非行、引きこもり、ニートの問題も、依然として変わらない。

学校や塾での良い成績は、親にとって絶対的価値である。成績さえ良ければ、天下御免の子どもたちであるが、しかし、大学を出て就職した三分の一は中途退職しているのが今日の現実

でもある。日本社会は、何か大切なものを欠落したまま進んでいるのではないだろうか。

大学のクラブ活動の指導に来ている若い卒業生たちが、共通の懸念を語っていた。教師になる内的なモチーフのないまま、流れて教員採用試験を受ける学生が増えているように感ずる、と。学生の特権である、友人との深い交遊、自分や時代との格闘といった豊かな精神遍歴がないのであろうか。数値目標などが言われる影響もあるのだろうか。

## 人間教育の課題

体験教育で先駆的な活動をしている卒業生の皆さんと話すと、さりげない指摘のなかに現代日本の重い課題が示唆されていることに気づく。

子どもたちと野外の飯盒炊飯やると、「お米をこぼした」「火がつかない」とすぐ訴えて来る。「それがどうしたの」と突き放す。子ども自ら問題解決できるようにするには、何日かの合宿が必要だと言ふ。しかし家に帰ると、二元のもくあみとなる。

家庭でも学校でも、親や先生、やさしいお兄さんお姉さんが、訴えればすべてやってしてくれる。どこか変である。安全安心と言ふ。しかし、子どもたち自身の危機管理の勘やセンスは、一体どこで養われるのだろうか。

このパターンは大学を卒業しても変わらない。営業から帰って来た新入社員は、「こうこうこうなんです」の報告ばかり。上司に困ったことを言えば、何とかしてくれると思いきんでいる。自分の判断で「こうしました」という新入社員は百人に一人もいないと、企業に務めた卒業生は語る。

更に問題なのは、人間関係に負担を感じ、引きこもりになる若者たちである。六四万のニートという数字があるが、家族経営のところでは働く形にしている人を合わせると百万人とも二百万人ともいわれる引きこもりである。働くことの出来ない若者を大量に生みだしている日本社会とは一体何なのだろう。

## 「教育者」の拓く地平

こうした現実には、明らかに学校の先生方の力バー範囲を遥かに超える。ここで求められるのは、教育の観点を持った、さまざまな専門家たちである。

ある地域の映画祭で、中学生、高校生が「いじめ」をテーマに映画製作をした。シナリオづくり、映画撮影、音楽、デザインといろいろな専門家たちが協力した。生徒たちの成長は目を見張るものだったというが、こうした課題に対応できる人材が、いろいろな局面で今求められているのだ。

こうした指導者を養成する専攻を本学は持っている。表現コ

コミュニケーション専攻、生涯スポーツ専攻、文化財科学専攻、多言語多文化専攻、総合音楽専攻、等々である。

ところが最近、憂うべき事態が生じた。文部科学省は、そういう課程をもっている教育学部の課程廃止を打ち出し、「教員養成に純化しろ」と言い出したのである。

国際、地域、多文化、環境、生涯学習、等々、教科におさまらない境界領域の学問分野に対応した「新課程」を本学では「教養系」と呼んでいるが、既に一万五千人の卒業生がいて、各分野で活躍している。その課程を廃止せよというのである。

「教員養成に純化し、教員になる数値目標を達成すればよい」と文部科学省は考えている。冗談ではない。東京学芸大学は、大学であつて、特定の技術を教える専門学校ではない。

卒業生に聞くと、学芸大の最大の魅力は、教員養成の基幹大学であると同時に、教員養成に純化しない観点の広さだという。それは、初代学長の木下一雄が主張した「学芸＝リベラルアーツ」に立った教育者の養成の伝統によつていられる。「教養系」がそこに加わつて、アカデミックに、多彩にリファインされ、その魅力が更に増した。

## 日本社会の深部からの課題に応える

本学のこの魅力は、青春の自由な謳歌、模索と彷徨の中で、学問においても、日々の生活においても深々と貫かれ、資質の違った学

生と青春をぶつけあつた体験は、現在の仕事へのパトスともなり、後輩達に本学を素晴らしい大学だと自信をもつて勧める動機ともなつていられる。

国民国家の呪縛に捕らわれ、国民教育に限定した教員養成純化路線は、グローバル社会にも対応していない。国はこれから留学生を増していく方針と聞くが、留学生に魅力のない大学になつてしまえば、本学は国際社会に、どのように伍していくのだろうか。

修士課程はよいにしても、博士課程は特殊に高度だという話は、留学生のみならず、本学を希望する日本の学生からも多く聞く。学部が多様性を反映した博士課程をとつてほしいが、これは東京にある国立大学という本学の位置から、国際的にも国内的にも自然に生まれる当然の期待である。

「有為の教育者」の養成が本学のミッションである。この広い観点は、教員をはじめとするそれぞれの分野で活躍する卒業生の実態と合致し、今日の日本社会の分析から導かれる諸課題の必要とも合致している。

鋭角的で複合的な課題が、日本の社会の深部から噴き出している。この国民的課題に全面的に対決し、真正面から責任を持つて取り組むことこそが、私たちの大いなる使命であり、生き甲斐であり、誇りであろう。◆

# 大集合 鷺山会長も出席

## 北京のホテルに五十人集まる 中国全土から 日本からも

「聚会」の会場は金台夕照会館ホテル。毛沢東主席の肖像画の掛かる天安門広場から南東へ3キロ余り離れた北京市東城区にある。北京の市街風景はすさまじいばかりの変容ぶり、とりわけ5年前の北京オリンピック以来、町は摩天楼の林で、ニューヨークと見まごうばかりの「近代都市」の様相である。

金台夕照会館は、そんな超高層ビルの林立する中心街を少し外れ、北京中央駅の南側、かつての北京のたたずまいが色濃く残る夕照寺街に面して建っている。六階建ての会館（ホテル）の名称にもなっている「夕照寺」は、ホテルのすぐ裏手にあって、中国の寺院らしいたたずまいで、それが

らして一種のタイムトリップをしたような感覚になる。ホテルは外観とは違って、中は西洋式のそれで、部屋はゆつたりとして落ちついた雰囲気である。聚会の会場となったのはこのホテルの一階（正確には半地下）ロビーで、チエックインカウンターの前にあって、喫茶コーナーであり、食事時にはレストランにもなるという空間である。

五十人以上がゆつたりと食事ができるこの空間を「聚会」のために貸切という特別の手続きを取ってくれたのは、今回の聚会の一から十までの手配をした世話役の安迪（アンディ）さん（〇二年学部卒）たちである。

### 久しぶりの再会に感激

二〇一三年八月十一日（日）午後一時、この会場に次々と出席者が現れた。廊下を歩いてくる友を認めるも、駆け寄って固い握手を求めると、歓声を上げながら肩を抱き合うものもいる。こんな感激的な再会シーンは、いつ果てるともなく延々と続いた。東京学芸大学を卒業して、故国の中国に戻って以来、初めての再会だ、という人も多い。おおむねが十年近い歳月の末の再会なのだ。「学生」同士だけではない。会場には、この会合のために東京から駆けつけた椿真智子留学生センター長。同じく留学生センターの島田めぐみ先生、谷部弘子先生、そして鷺山恭彦辟雍会会長（前学長）も前日に北京入りして、卒業生たちが集まってくるのを待ちかねていた。その先生たちの姿を見付けて駆け寄ってくる卒業生もいる。

気がつくといつの間にか、会場は人で溢れていた。ざっと五十人にもなろうかという人の群れである。あ



# 北京に中国留学生



こちらに思い思いの人の輪ができて、さわやかな笑い声がこだましている。その声の中で会場正面の赤地に「東京學藝大學留學生北京聚會」と鮮やかな金文字を配した横断幕が掲げられた。聞けば同じ留学生の石小軍さん（〇二年英語教育卒）の手作りだという。早くもその横断幕の前で記念写真を撮るグループもいる。

会場の和やかなざわめきを遮って中国語が響き渡った。開会を宣言する安迪さんの声である。安迪さんは二〇〇二年大学を卒業すると、故郷の大連に帰り、身につけた日本語を生かせる仕事に就きたいと就職活動をしてみずほ銀行の大連支店に職を得た。その仕事の傍ら、自分のネットワークをフルに活用して東京学芸大学卒業生と連絡を取り合った。そして安迪さんの手元には百人近くにも及ぶ名簿が出来上がった。その名簿を手掛かりに「同窓会」の開催を呼びかけ、今回の聚会にまでこぎつけたのだ。五年ほど前、北京在住の人たちだけで集まりをもったことがあったそうだが、これだけ大規模なものは今回が初めてである。

聚会の行われたホテル  
「金台夕照会館」



「初めての東京学芸大学中国同窓会を開催します。本日は東京から驚山前学長先生、椿留学生センター長

先生、島田めぐみ先生、谷部弘子先生をお迎えし、さらに参加者は文字通り中国中から集まってくれました。また、卒業後も日本に住んでいる仲間はずわが東京から駆けつけてくれた人もいます。呼びかけ人としてこんなうれしいことはありません。短い時間ですが精一杯思い出話に浸ってください。それでは最初に驚山先生からご挨拶をいただきます。驚山先生は現在全国同窓会である辟雍会の会長をされておられます」。

安迪さんは日本語も達者なのだが、中国での同窓会ということで中国語での挨拶だった。が、日本から出席の驚山会長たちのために日本語の通訳がついた。その通訳を務めたのは趙曉霞さん（日本語教育卒）。趙さんは在学中に同じ中国からの留学生と結婚し、間もなく出産。お嬢さんを育てながら大学に通って卒業したというがんばりやさんである。現在は東京の貿易商社の中国・広州駐在員として広東省広州に十三歳になる長女と一緒に在住している。実はこの日、香港から駆けつけたという。夏休みを利用してお嬢さんとフィリッ

ンド、デンマーク、スウェーデンなどを旅行して香港まで帰り着いたところで、お嬢さんだけ一人、東京に帰し、自分は北京にやってきたという。趙さんは仕事で世界を駆け巡るのに日本のパスポートの方が便利という考えから日本国籍を取得し、現在はご主人ともども「日本人」になっている。彼女の日本語は日本人もかなわないほど流暢で美しい。彼女の見事な日本語を誉めると「うれしいです。実は私は中国の江西省の生まれです。廬山という中国共産党幹部の別荘があったところ、一九五九年に毛沢東の大躍進政策が失敗した後開かれた廬山会議で有名なところですが、ともかく田舎です。そこから日本に留学する人なんかいませんでした。日本に着いた時には途方にくれましたが、それだけに負けるわけにはいかなかった。中国語だって田舎の中国語ですからね……」と言いながら人懐こい笑顔を見せた。

安迪さんに指名されて驚山会長が立ちあがった。そして次のようなスピーチを行った。



：私は辟雍会会長の鷲山です。二〇一〇年に学長を退いてからこの全国同窓会辟雍会の会長をしております。「辟雍」というのは、この場にはご存知の方も多いと思いますが、中国の言葉ですね。春秋時代、つまり今から三千年も前の中国の大学のことだと言います。辟雍会は、そのお国の言葉をそっくり拝借しまして、同窓会の名称としました。その辟雍会は、二〇〇三年に創設されて、今年ちょうど十周年になります。

十一月のホームカミングデー、小井祭のときに辟雍会の十周年記念行事をするつもりで準備をしております。メインはタレントのビートたけしのお兄さんで化学者、環境学者である北野大さんの講演です。北野さん一家は何度かドラマ化されたように大変に特異な家庭だったということで、面白い話が聞けるのではないかと思っています。期日は十一月二日です。同じ日の夕方六時から、国分寺で記念パーティーも開催する予定です。もしこの時東京におられる方がいたらぜひおいでください。

「辟雍会」という名は皆さんあまりなじみがないかもしれませんが、インターネットで「へきようかい」と入力していただくとホームページが開きますので、ときどき見て、読んでください。いろいろな情報発信をしております。

みなさんは本日こうして中国から東京学芸大学に入って学ばれた方々が集まっておられますが、東京学芸大学は明治時代に開設された師範学校を基にして昭和二十四年（一九四九年）に大学になって以来、すでに約六万人の卒業生を出しています。と

ころがその学芸大学にすべての卒業生を網羅する同窓会というものがなかったのです。そこで十年前に辟雍会が設立されたわけです。私立大学などは同窓会組織が大変にしっかりしております。たとえば小金井でいえばすぐ隣の東京経済大学の同窓会は大変にしっかりしていると聞きます。国立大学というのは学芸大に限らず、どうも母校意識というのが愛校心といったものが希薄です。どうか皆さんは母校とのつながりを保っていただきたいと思うのです。

私は四年前から辟雍会の会長をしておりますが、その目指す方針に「出会い、触れ合い、ホットなニュース」ということを掲げまして、全国に支部を作るということを大きな目標にしてやって来りました。学科や研究室、クラブなどのOB会などを通じて、各都道府県に向いて都道府県単位の同窓会を作る、そしてそれを辟雍会の〇〇県支部という形にしていこうという活動です。しかし、なかなか思うようにはかどりませんで、何とか形になるのは年に二つか三つです。それでも現在では全国四十七都道府県の約半分で支部が成立してお

ります。七月には群馬県で支部が立ち上がりましたし、十月には関西地区、京都、大阪、奈良などの関西地区が合同して「関西支部」を結成する集まりを開くことになっております。十一月には埼玉、来年二月には宮崎と、支部立ち上げの準備が進んでおります。

同窓会というのは時々集まって思い出話をするということのも大きな存在意義ではありますが、そこから一歩踏み出して、同じ大学に学んだという意識を共有して、明日のエネルギーを生み出す、情報交換などの新しいネットワークを構築するというところに大きな意義があると思います。

私が本日こうして北京までやってまいりましたのは、本日のこの聚会をきっかけにして中国辟雍会の結成に向けての第一歩になる、そうした、という思いがあったからです。辟雍会としても、本日を第一歩として中国の留学生の支援などを、活動の柱にしていきたいと思っています。どうか、みなさんも中国の名前をもつ辟雍会に目を向け、関心を寄せていただきたいと思います。……



会長挨拶に会場からは大きな拍手が起った。それに続いて鷺山会長が「本日の会がさらに大きく発展しますように」と乾杯の音頭を取ったところで、さらに大きな歓声が巻き起った。

鷺山会長は機関誌「辟雍」の最新号、昨年発行の第九号を出席者全員にいきわたるように持参してテーブルに置いたが、出席者はそれぞれがその「辟雍」九号を手にとつて食い入るように読み始めていた。

懇談が始まると、真っ先に鷺山会長のもとにやってきた大柄な女性二人がいた。一人は大連からやってきた陳岩さん（〇三年生涯スポーツ大学院修了）で、男性と並んでもひときわ高いその身長から在学中バレーボール部に所属していたというのが

うなずける。現在は大連で貿易会社の経営者をしているという。もう一人は南京からやってきた林敏潔さん。中国を代表する水泳選手だったという。現在は南京大学、南京師範大学、北京師範大学など多くの大学で教えている。鷺山会長は二人の在学中も



この聚会を組織した安迪さん（左）と通訳した趙曉霞さん



よく知っていてしばらく思い出話に花が咲いているようだった。

子供連れの出席者も目に付いた。上海からやってきた全霊玲さん(〇四  
年情報教育卒)もその一人である。  
上海の高校を卒業して日本の拓殖大  
に一年間留学。さらに学芸大に進ん  
でコンピューターを学んだという。  
現在は上海でコンピューター関係の  
会社でプログラマーとして働いてい  
る。亜細亜大に留学していた人と結  
婚して娘が一人いる。今回はそのお  
嬢さんを連れての出席だった。

そのお嬢さんは当方のメモ帳に「全  
嘉園九歳」と書いてくれた。厦門か  
ら来た張秀紅さん(〇六年学校教育  
大学院)もお嬢さんを連れての参加  
だ。現在は厦門集美大学外国語学院  
の教師をしているという。

子連れのカップルがいた。夫婦で  
参加なのかと早とちりをしたが、男  
性の方は蔡誠さん(社会科経済大学  
院卒)で、お嬢さんを連れての出席。  
女性は賀晶さん(〇五年蔡さんと同  
じ経済大学院卒)で、専攻が同じ同

窓生だったのだ。賀さんもお嬢さん  
を連れていた。蔡さんは北京で人民  
教育出版社に勤務しており、賀さん  
は日立電線の北京事務所に勤めて  
いる。

大学の先生も多い。北京・对外経  
済貿易大学英語学院の石小軍さん  
(〇二年英語教育大学院卒)、北京師  
範大学の林洪さん、北京教育科学研  
究院の蘭飛龍さん、北京語言大学の  
楊峻さん、蘇州大学の朱剛さん(題  
字の「辟雍」を書いてくれた)など  
である。

特筆すべきなのはわざわざ東京か  
ら駆けつけた人がいたことだ。杜宏  
科さん(〇三年技術教育)、劉莉薩さ  
ん(経済学)、そして折英群さん(〇二  
年国際教育卒)である。折さんはご  
主人ともども既に日本国籍を取得し  
て、東京で日本の会社に勤めている。

いずれもたくましく生きている人  
達ばかりだった。東京から出席した留  
学生センターの先生方も、教え子たち  
の元気な姿に感激することしきりだっ  
た。◆(報告・写真も遠藤満雄)

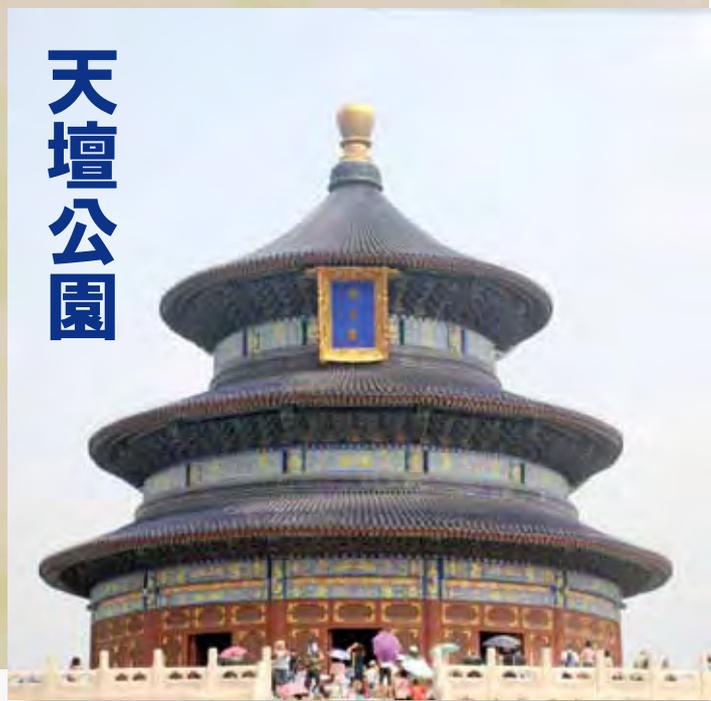


聚会雜感





夕照寺街



天壇公園



# 椿真智子留学生センター長に聞く

大学には「留学生センター」という組織がある。N棟二階にあって、今回の「北京聚会」にも出席した椿センター長、島田めぐみ、谷部弘子先生たちも、この留学生センターに所属している。東京学芸大学が留学生を受け入れるようになり、留学生センターが設置されたのは、一九九八年である。

現在の東京学芸大学の留学生はどのくらいいるのか、その現況などを椿センター長に聞いた。

——現在、留学生はどのくらいいるのですか。

椿 二八六人です。秋の入学でもう少し増えると思うのですが、十年前のピーク時に比べると一八八人の減少ということですから、それでも二十三の国と地域から集まっています。

——それでも世界各地から三〇〇人も外国人留学生が日常的にキャンパス内にいるというのは学芸大の大きな特徴ですね。

椿 そう思うのですが、私がセンター

長になる前から感じていたことですが、大学という組織の中で留学生がそれほど大きな存在になっていないという気がします。

——どういことですか。

椿 例えば留学生と日本人学生とのコミュニケーションのようなプログラムは今のところ全くありません。プログラマがないだけではなく、日常の生活の中でも学生や教官が留学生と交流するという機会はほとんどありません。もったいないことだと、ずっと思っていました。

——本当にそれはもったいないですね。

椿 たとえば私の文化地理学の研究室にも留学生はいま

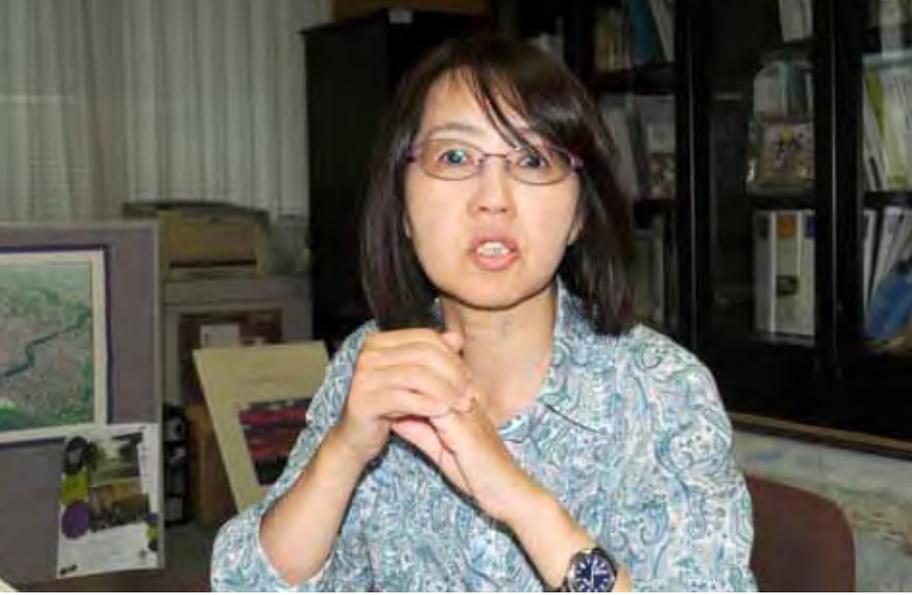
す。でも日本人の学生が留学生に話しかけているという場面を見たことがありません。地理のように世界のあらゆる事柄に関心を持たなくてはいけない学問なのに、好奇心がないというのでしょうか、非常に引込み思案なのです。それと教員研修留学生という短期（約一年）に学芸大に来ている留学生もいるのですが、この人たちは本国で既に教員として教壇に立っている人達で



す。その人たちの感想を聞いたことがあるのですが、「もっと日本人の学生と話をしたかった」というものでした。

——聞けば聞くほどせつかくの宝物を大事にしないという感じですか。

椿 ただ、生協に留学生委員会とい



うのがあって、ときどき留学生との交流イベントのようなもの、例えば、お花見の会や七夕まつりなどを企画してくれています。しかしそれもそこだけのことに終わってしまっているようです。

——卒業後の留学生との交流はいかがですか。

**椿** 現役の学生でさえお話ししたような現状ですから、卒業生となると大学もほとんど把握していないし、情報交換も交流もないと言っていると思います。ただ、二年ほど前から大学はネットワークづくりというこの力を入れ始めましていわゆるフェイスブックでの情報交換などは徐々に盛んになってきています。

——その意味でも留学生の半分以上を占める中国人の卒業生たちが集まって「同窓会」を開いたという今回の「北京聚会」は意義がありましたね。

**椿** その通りです。あんなにたくさん卒業生が、中国中や日本からも馳せ参じて、あんなに和やかな交流ができたということは素晴らしいかっと思えます。これからはこうしたパワーをどんどん生かしていきたいと思いますね。◆

【インタビュー・遠藤満雄】



北京聚会で留学生の近況を聞く椿センター長（右）

# 評議會はなぜどのようにして設立されたか 創設功労者の三人が語り合う

評議會は今年（二〇一三年）五月まで「評議會（東京学芸大学全国同窓会）」と名乗っていた。十年前の創設の時、評議會の説明、注意書きのような意味合いでカッコ書きしたものである。つまり、全国を網羅する同窓会はこの評議會だけですよという宣言である。逆に言うと、東京学芸大学には十年前まで全国規模の同窓会はなかったということでもある。それでは建学から五十年以上もたつてからなぜ全国同窓会を作ったのか、作る理由はどこにあったのか……。評議會設立に動いた当事者に集まってもらって、そのあたりを語ってもらった。出席者は当時の学長・岡本靖正氏、社団法人・東京学芸大学同窓会元理事長（当時副理事長）の吉野尚也氏、そして初代の評議會会長である荒尾禎秀氏の三氏である。

## 背景には国立大学法人化が

——評議會は設立から十年経ちました。会員数も一万人を超え、都道府県別の支部も二十に及び、形としては順調に成長していると言えます。ただ、評議會は同窓会としては大変に特異な組織形態を持っています。十年前、どうしてこうした同窓会を作ったのか、設立に深くかわられたお三方にお話を伺いたいと思います。まず、岡本さん、大学側の必要性、要請があつて設立されたと聞いていますが、どのような事情があつたのですか。

岡本 私は昭和五十年（一九七五年）に学芸大に赴任したのですが、そのころは教員採用は売り手市場と言いますか、卒業生の就職の心配はほとんどありませんでした。ところが一九八〇年代になると、日本の人口動態に変化が萌しはじめて、いわゆる少子化の芽のようなものが見え始めた。今後の日本の人口構成も見えるようになり、当然当時の文部省あたりでも児童・生徒数の減少も見えますから、教員の採用数も減

らす方向性を出してきました。すると学芸大でも卒業生の教員採用率が下がって来ました。そうした背景があつて、教員養成だけの単科大学でいいのかどうかという議論がされるようになり、文部省からもそうした指導も入るようになりました。ここで具体化されたのが「教養系」いわゆる「ゼロ免課程」という教員免許を卒業の要件としない課程を創設するということになりました。一九八八（昭和六十三）年のことで

す。その四年後には教養課程の卒業生も出たわけで、これまでの学芸大の歴史と違う教員免許を持たない卒業生が出たことにより、新たに就職問題が起こって来ました。

それともう一つ、国立大学の法人化という問題も出てきました。これは自民党が打ち出した国家公務員を減らすという政治的方針に基づいて、全国の国立大学の十三万人の教職員を国家公務員の枠から外すという動きです。各大学の自由度が増すというメリットを強調されたのですが、各大学としては教職員の数を削減しなければならぬという事態に直面しました。そんな情勢の中で今後の大学運営には卒業生のお力を借りなければならぬという局面になったわけです。

——ところが学芸大にはその卒業生をまとめる同窓会組織がなかったわけですね。

岡本 社団法人・東京学芸大学同窓会という伝統のある立派な同窓会が



辟雍会設立を語る三人＝国分寺で

ありました。しかし残念ながらこの同窓会は全国組織ではなかった。社団法人の同窓会の方々とも何度も話をさせていただきましたが、どうしても新しい組織を作るしかないという結論に至ったと思います。

### 明治時代から続く

#### 師範学校同窓会

**吉野** 私は当時副理事長をしておりましたが、佐藤倫則理事長から、お前が代表として行け、と言われまして設立に関わることとなりました。われわれの組織は「社団法人・東京学芸大学同窓会」と申しまして、昭和二十八年、大学がスタートして初めての卒業生を出た時に設立されました。まず、なぜ社団法人という組織形態を持っているかという点について申しますと、当時、日本全国の小学生を対象に「夏休み学習帳」と「白地図」を作って提供してありまして、そこに一定の利潤が生じていた。文部省の指導だったと思います

がそういう事業を行うのなら法人格を持たなくてはいけない、ということになりました。社団法人という形態をとりますと様々な利点もありますが、自由な動きを制限されるという面もあります。法人ですから定款を持たなくてはなりません。この定款に細目にわたっての規則が定められます。組織の原則を変えるというようなことはできないのです。ご承知のように東京学芸大学の前身は「師範学校」です。明治五年に学制が發布されてすぐに教員の養成が急務となり、師範学校が創設されるのですが、学芸大の前身となった師範学校は基本的に東京府、東京都の小学校の教員を養成する機関でした。この師範学校の同窓会は一回目の卒業生が出るとすぐ設立されているのですが、当然ながら卒業生は全員が東京都の小学校の教員になりました。その後、社団法人同窓会は東京都の教員以外は入れない、という言われ方をしましたが、師範学校の

同窓会は全員が東京都の教員という

ことで、それ以外の人は卒業生に  
なかつたのです。その伝統が大学に  
なって卒業生が出て変わらなかつ  
た、という事情なのです。私の個人  
的な見解としては、昭和二十八年に  
大学の同窓会となつた時に、定款を  
変えるなり、組織の原則を見直すな  
りして、全国同窓会にしておけばよ  
かつた。また今日のように卒業して  
も教員にならない、教員免許を持た  
ない卒業生を出す時代になつたので  
すから、もっと広い門戸の同窓会に  
しておけば、今の辞雍会のような苦  
労がなくても済んでではないかと  
思います。しかし昭和二十八年当時  
の同窓会の役員・幹部は全員が師範  
学校の卒業生ですから、師範学校時  
代と同じ感覚というか、東京都の教  
員だけが対象でいい、と判断したの  
でしょうね。

——その定款を変えて「全国同窓会」  
にするというのはできなかったのだ  
すか。辞雍会の設立が検討されだ

したときに……。

**吉野** いろいろ研究してみたので  
すが、できないのですね。もしそうす  
るなら社団法人というのをやめなく  
てはならない。その判断は我々の方  
にはありませんでしたね。

**岡本** それで社団法人同窓会も含め  
て全国の教員、さらに教員以外の職  
業についておられる卒業生も参加で  
きる組織を作らなくてはならない、  
ということになつたのです。大学と  
してはなんとしても卒業生の方々の  
お力をお借りしたかつた。そのため  
の窓口というか組織がどうしてもほ  
しがつたのです。

——そこで初代会長の荒尾さんに伺  
いますが、設立当初に一番苦勞され  
たのはどういうことでしたか。

### 難しい組織づくり

**荒尾** 組織をどう作るか、というこ  
とでした。それと大学と社団法人同  
窓会との関係をどう調整するかも重  
大課題でした。組織作りの面では、

既にある同窓

会、クラス会  
のようなもの  
をまとめて辞  
雍会の中に組  
み入れていく  
ということ  
を考えたので  
すが、なかなか  
うまくいきな  
い。既に活動  
をしているク

ラス別、学科別のOB会などは、今  
のままでもいいわけですし、辞雍会に  
参加する意義がどこにあるのか分か  
らない、といった反応でした。都道  
府県別の地方支部というのも、すで  
に活動しているところもあるのです  
が、それを辞雍会の中に組み入れる  
というのは簡単にはいかない。結局  
すでに卒業してしまっている人達の  
組織化というのは大変に難しい、と  
いうことでした。そういえば、卒業  
生の組織を作るということで利用さ



岡本靖正氏

せていただいたものに、創立五十周  
年で作った卒業生名簿でした。あれ  
はどこが作ったものでしたかね。

**吉野** 我々が作りました。データは  
大学から提供していただきまして、  
名簿として出版したのは社団法人で  
す。あのころ我々も東京都だけの同  
窓会でいいののか、という議論が起  
こって来まして、全国にいる卒業生  
の情報の収集を始めた。誰が何県で  
教員をしているとか、校長になった、  
教育委員会にいる、などという情報



ですね。それをさらに充実、拡充しようとして名簿の作成を考え付いたので。大学が持っているデータを提供していただくというのは大変だったのですが、たしか五十周年事業の一つということ、形になりました。後にも先にも全国規模の名簿というのはあれしかないですね。

それと、今組織をどう作るかというお話が出ましたが、私は辟雍会を作るときにやはり元になる組織をどうするかが最重要問題だと思いまし

た。そこで私が考えたのは縦軸と横軸の重なり合う部分を組織化する、ということでした。つまりマトリックスを作るのです。その縦横の軸は卒業年次と専攻クラスだと考えました。そこから支部というのか辟雍会を支える組織を作る必要があると考えたのですが、結局、辟雍会はそう

はなりません。作り易いところから手をつけていった。つまり役員の方の個人的な知り合いから始めるというやり方でした。これは私の基本的な考え方と違うな、と思っ

たものです。

**荒尾** 何か集団があつて動いているところがあつたら「その名簿をください」と働きかけてみたのですが、なかなかうまくいかない。辟雍会に入る、その傘下に入ることにどのような意味があるのか、現状では辟雍会に入る意義が分からない、ということでした。

**吉野** そのところが私にはよくわからない。同窓会というのは一体だれのための組織ですか。自分にとって得か損かで測るような組織ではないでしょう。私は同窓会は自分に何をしてくれるかではなくて、自分は何をしてもらえるか、と考えています。お世話になった大学への恩返し、それは具体的に後輩たちに何か手を貸してやる、ということではないでしょうか。

### 同窓会のメリットは何か

——— そうですね、荒尾会長の時代にも「現役の学生会員にとつて辟雍会員であるメリットは何か、学生に何をしてくれるか」という議論をずいぶんしてやりましたね。例えば辟雍会会員カードを作りましたが、このカードを持つているとどんな特典があるのか、ということも話題になりました。結論で言うとも何もないですね。

それと、この十年間で組織率がだんだん下がって来ました。その最大の原

因は、スタートの時には新生が入學手続きをするのと同時に辟雍会入會手続きもしてもらうという方法でやっていたものが、近年は入學手続き及び入學金の払い込みはほとんどが振込とということになって入學金の払い込みと同時に辟雍会費を払ってもらうという方法が十分に機能しなくなったことにあるようです。組織率が低下することについては財政的にも厳しくなってくるということですから、十年目の課題はそんなところにもあるかもしれません。

ところで、入學と同時に入會してもらう、入會金を払ってもらおう。つまり現役学生も會員である、さらに大学の職員も教官も、つまり学芸大に関係のあるものは全員が會員であるという、一般の同窓会とはずいぶん趣の違う組織ですが、このアイデアはどこから生まれたのですか。岡本さんのアイデアですか。

**荒尾** 亡くなった池田義人初代幹事長のアイデアです。池田さんは志半ばで急逝されましたが、なかなかの

アイデアマンで、組織作りの素案のようなものはほとんど池田さんからでたものです。任期中に亡くなられましたが、現在を見たらどう感じられたでしょうかね。

## 「辟雍」とは

### 古代中国の大学のこと

——「辟雍会」という名称は古代中国（春秋時代）で六芸を教えた大学「辟雍」からとりました。Ⅱ3ページ扉参照Ⅱ中国文学の佐藤正光準教授（当時）の命名です。ただ一般にはなじみの薄い難しい言葉なので（東京学芸大学全国同窓会）というカッコ書きをつけて説明しました。最近のこのカッコ書きが問題になりました。「同窓会というのはおかしい」という議論になりました。今年五月の理事会で、同窓会という名称をやめて「東京学芸大学辟雍会」にするという決定がされました。新しいスタートかもしれません。最後に三方にこの十年を振り

返っていただき、今後を展望していただきたいと思います。

**岡本** 辟雍会設立総会（二〇〇三年十一月三日）の一週間後が私の学長任期の終了の日でして、それ以後は脇から見させていだいたのですが、荒尾会長は大変な激務の中で会長をされて大変ご苦労なされたと思います。しかし、今では鷺山会長が大学業務から解放されたところで辟雍会のみで関わっておられるので、ずいぶんやり易いのではないかと思えます。そして実際、たくさんの地方支部も立ち上げられたし、十年前には考えもなかった海外にも支部を広げようという動き、大変に結構なことだと思えます。辟雍会に期待するものは

ますます大きくなっていると思えます。

**荒尾** 最初はすべて手探りでやってきて、できなかったものもたくさんありますが、総じて言うところ「こんなものかなあ」という印象です。まずまずの成長と動きをしていると思います。

**吉野** 社団法人同窓会も今年の六月から「一般法人」となりまして、新しいスタートを切りました。私たちは大学に対してなにができるか、を常に念頭に置いて活動していくつも



荒尾禎秀氏

りです。辟雍会もそのことをぜひ考えていただきたいし、その意味ではまさにこれからののではないでしょう。設立の時に掲げた「同窓会館の建設」もまだ手付かずのようですし、やはり学芸大が築き上げた文化と歴史を守り、育てるために何をしていくかを常に考えていただきたいと思います。学芸大はその根源をたどれば師範学校です。一四〇年の歴史を刻んでいます。大学としても六十四年の時を刻みました。歴史と文化を軽視する国家は滅びると言われる通り、先輩たちの築いてきたものをしっかりと受け継いでほしいと思います。その拠点の一つは辟雍会です。

——長時間ありがとうございました。

◆（司会・遠藤満雄）

# 創立の日 2003年11月3日の出来事



役員会



設立総会



表彰式



音楽会



祝賀会



立食パーティ



## 「辟雍」創刊号の特集を再録する

# あの年はアテネオリンピックだった

この機関誌「辟雍」の創刊号が発刊されたのは二〇〇四（平成十六）年十月三十日である。覚えておられる方も多いと思うが、この年は二十一世紀に入って初めてのオリンピックが開催された年である。場所はギリシアのアテネ。オリンピックは一世紀を経て、発祥の地・アテネにもどったのである。この歴史的なオリンピックに学芸大OGが二人出場した。陸上女子800㊦の杉森美保さんとビーチバレーボールの楠原千秋さんである。

そこで創刊号ではこの二人を中心にアテネオリンピックを巻頭の特集とした。新しい形の「同窓会」のスタートに当たってふさわしい内容だと思ったからである。いまここにその時の内容を採録しながら、十年前を振り返ってみたいと思う。

冒頭の特集は「——アテネオリンピック代表・杉森美保選手を囲んで——陸上女子800㊦は東京学芸大学の伝統種目」と銘打って、三人の女性アスリートの座談会という形になっている。三人のアスリートとは一九六六年保健体育科卒業の梶原（宮本）洋子さん、現役の西村美樹さん（生涯スポーツ四年）、それに杉森さんである。この三人には誇るべき共通点がある。三人が三人とも陸上女子800㊦の日本記録保持者である、

という共通点である。梶原さんは一九六五年、大学四年の時に2分11秒0という日本記録を打ち立てた。東京オリンピックの翌年のことである。それが一年遅かった故に東京オリンピックの代表にはなれなかったという悔しい思い出がある。次の日本記録保持者は西村さんである。西村さんは高校時代（東京高）からその実力が注目され、学芸大に入學すると同時にインカレで大活躍。なんとインカレ四連覇という「偉業」を成し遂げ

ている。そして杉森さんである。杉森さんは学芸大時代は短距離が専門で200、400㊦に出場していた。実業団の京セラに入社してから800㊦に転向した。そして花開き、あと一歩で2分を切るという2分0秒45という記録をマークした。これは西村さんの持つ日本記録を打ち破るものだったのだ。結局、西村さんは杉森さんに負けがゆえにアテネオリンピック代表にはなれなかった。この経緯を見れば「女子800㊦は東京学芸

大学の伝統種目」と銘打った理由がわかっていただけたと思う。

さて「座談会」の骨子を再録しよう。

——杉森さん、オリンピックの舞台はいかがでしたか。

杉森 ほかのどの大会とも全く違う雰囲気でした。最高の舞台だと感じました。スタジアムに入った瞬間の歓声や雰囲気は今まで行ったことのあるどの競技場とも全然違うものを肌で感じました。

開会式は参加できなかったのですが、アテネに着いて、スタジアムに入った瞬間に「あー来たんだなあ」という実感がジワジワ湧いてきました。そして、ついにオリンピックの舞台に立った、という嬉しさにも変わりました。

——レースではあなたはスタートするとすぐトップに立ちましたね。



杉森 あれは緊張感からだったと思います。周囲がとても速く見え、無理やりにも前に出なくてはいけないと感じたのです。結局最後まで力を持続することができなくなって、自分の力を出し切れませんでした。とりあえずの目標にしていた予選突破もできず、自己ベ

ストにも遠く及ばない2分2秒82という結果に終わりました。——いつごろからオリンピックを意識したのですか。杉森 大学までは短距離選手だったのでオリンピック選手になれるとは思っていませんでした。アジアのレベルで活躍できたらいいな、

と願うくらいでした。京セラに入っ  
て大森国男監督に出会ってからです。エドモントンの世界陸上で1600メートルの一走を走らせ  
てもらって、それから800メ  
をやってみたいと思うようにな  
りました。そして世界陸上より  
上のオリンピックを意識するよ  
うになったの  
です。

——梶原さん  
が800メートルを

始めたきつ  
きは何ですか。

梶原 大学に  
入ってからで  
す。高校（都  
立駒場）時代  
は2000メートルで  
インターハイ  
に行きまし  
た。また幅跳  
びや跳躍を  
やっています

た。インターバルトレーニングを  
すると、一本目、二本目では負け  
るのですが、本数が多くなるとほ  
かの人より強かったのです。もし  
かすると私は長い距離の方が向  
いているのかなと感じてました。高  
校三年の時に高校生活の思い出と  
して400メートルで東京女子選手権に  
出場したら、オリンピック候補選  
手に勝ったんです。それで大学で  
は400メートルと800メートルを始めまし  
た。

——西村さんは800メートルはいつから始め  
たのですか。

西村 高校（東京）からです。中学  
時代はバスケット部でした。でも  
子供のころから走ることが得意  
だったので、高校では陸上部に入  
りました。最初は3000メートルを走っ  
てみましたが、長距離はあまり好  
きではなかったもので、400と  
800に切り替えました。

——梶原さんは東京オリンピックの直  
前に大学に入られたわけだから、

# 陸上競技 マガジン

第19回朝日国際マラソン  
高地トレーニング

—その効果と検討—



ベースボール・マガジン社 発行

1965年日本記録を樹立し雑誌の表紙を飾った宮本（現 梶原）洋子さん（学芸大の校章を胸に先頭を走る）

—それを杉森さんに阻まれたので  
すね。

**梶原** 私の後、三十七年ぶりに学芸大が800mでチャンピオンを取ったと新聞で知りましたが、それが西村さんでした。西村さんが私の果たせなかつたオリンピック出場を果たしてくるのかなと思っていました。

—ところで皆さんが学芸大を選んだ理由は何ですか。

**西村** 自分のペースで練習できるということが一番大きかったです。他の大学だと自分自身の個性が出せないかもしれないという心配がありました。

**杉森** 教員志望だったので、教員免許が取れることが大きかったです。陸上にすぐ強い名門校にはあまり魅力を感じませんでした。学芸大は強い選手が数名いて、さらに雰囲気もいいと聞いていたので、そういう中で楽しみながらやっていきたいと思って選びました。

当然オリンピックを意識したのでしよう。

**梶原** もう一年時間があれば出場できたのではないかと思いますけどね。残念ではありません。間に合わなかつたんですよ。今思うとオリンピックというのは素晴らしい勲章だと

思います。もしオリンピックに出場できていれば自分の人生も多少変わったかと思っています。また出場できなかつた悔しさもありますので、他の面でチャレンジしなくては、という考えにつながりましてだけだね。

—西村さんはオリンピックについてどう思っていますか。

**西村** 出場したいと思っています。大学四年の時にアテネオリンピックがあるかと分かつていたので、それを目指したいと思っていました。すが……。

梶原 高校の先輩に学芸大出身の方

がいたのです。それと国立大学なので親孝行ができるかなということもありましたね。大学で教えていただいたのが亡くなった押切先生です。先生は知らないことがあれば一緒に調べていこうとか、考えていこうとおっしゃって、自分で考えさせるという指導をしてくださいました。その時の指導は今も自分の中で大きく生きています。マラソン協議などの解説の仕事もさせていただいています。自分は教育系の大学出身だということ強く意識します。つまり、「この選手が伸びていくために必要な言葉、教育的な視点での言葉が自然に出てくるように培われてきたのは、学芸大出身だからだと思います。学芸大にいたことが本当に私の財産になりました。」

【又七】

杉森さんはオリンピック出場当時は京都の実業団チーム「京セラ」の所属だった。その後福島ของทีมに移籍したりしたが、間もなく競技生活に終止符を打った。結婚のためである。相手は早稲田大学から広島中国電力の主力選手であった佐藤敦之さんである。結婚当初は佐藤さんの勤務先の中国電力がある広島県に住んだ。その後、佐藤さんが中国電力を退職することになって、佐藤さんの生まれ故郷である福島の会津に転居した。「大河ドラマ・八重の桜」の舞台である会津が第二の故郷になった。杉森（佐藤）さんは、今一度世界の検舞台を目指すという佐藤さんを支える立場で、会津の女になりきっている。

## 新しい種目ビーチバレーで 世界にはばたいた楠原千秋さん

ビーチバレーはオリンピック種目としては新しい。正式種目に採用されたのは一九九六年のアトランタオリンピックからである。日本はその大会以来出場を続けている。アテネは三回目の大会ということになった。そのアテネに日本の代表として参加したのが楠原千秋さん（九八年生涯スポーツ卒）だ。過去二大会、日本はバルセロナ五位、アトランタ四位と順位を上げてきていたので、当然楠原さんたちのチームにはメダルの期待がかかっていた。……しかし結果は予選敗退——期待を裏切ることになった。その楠原さんに、楠原さんの出身地である愛媛県松山市でインタビューした。記事は題して「小金井キャンパスが作ったアテネへの道 ビーチバレーで世界を駆け巡る」。

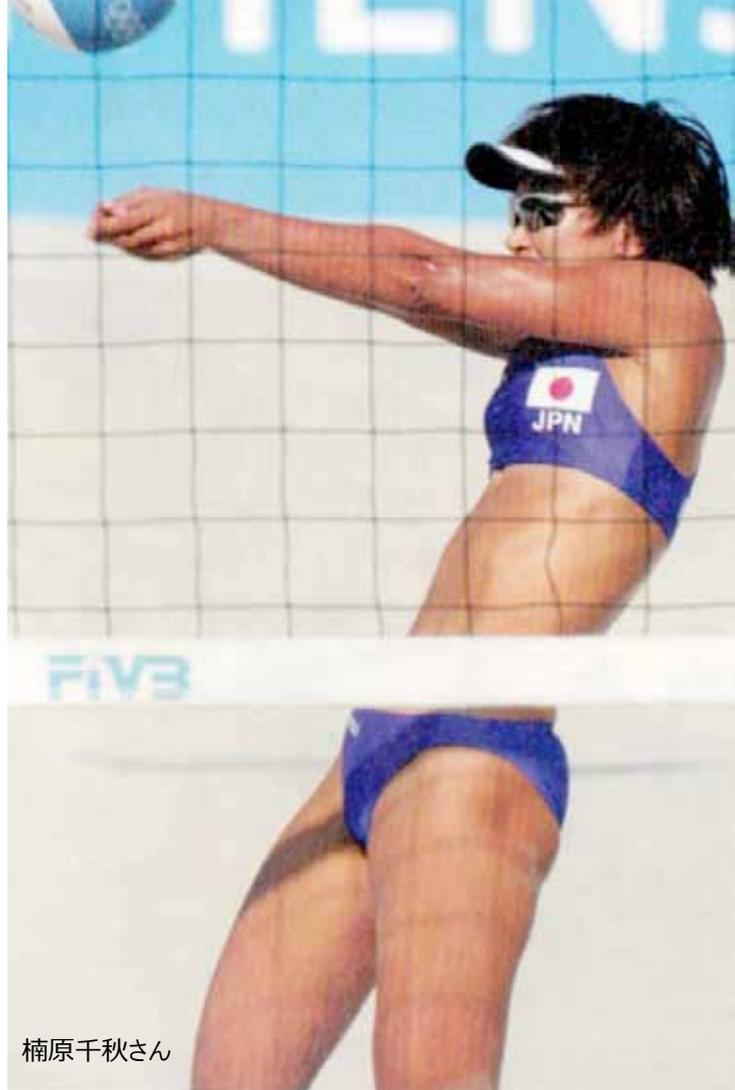
——アテネは残念な結果でしたね。

楠原 はい、ご期待に応えられなかつ

たのですが、実は当然の結果でもあるのです。メダルもあれば予選敗退もありということ。予選リーグで第一戦にアメリカと当たることが分かった時、そう思いました。アメリカチームは予想通り圧倒的な強さで優勝しましたよね。アテネでの最初のゲームがアメリカ戦だったのです。アメリカに負けるのは当然なんです。実はオリンピック前にギリシアのロードス島でワールドツアーがあつてアメリカと対戦したのです。そして「とても勝てる相手ではないな」と感じました。

——あなたが日本代表になるまでの経緯を教えてください。

楠原 日本はアトランタ以来男女一組ずつ出場してきたのですが今回のアテネは私たち女子だけです。オリンピックに出場するにはワールドツアーでランキング二〇位以内という条件があります。このランキングは世界各地を巡って年間



楠原千秋さん

七戦から八戦行われるツアーでポイントを稼いで決定されます。私たちはアテネの直前に二〇位のランキングを獲得して出場権を得ました。まあ、最下位当選みたいなものです。

——ということは日本代表ではあるが、日本国内で選考されたのではないということですね。世界の楠原なんだ。

楠原 そういうことですが、ちゃんと日の丸のついた日本のユニフォームを着て出場しました。

——ビーチバレーはいつから始めたのですか。

楠原 最初にビーチバレーの大会に出場したのは大学時代です。大学では、いや小学校時代からずっとインドアのバレーボールをやっている、大学でもバレーボール部でした。私の時代は結構強くてずっと一部リーグでしたよ。四年の時はキャプテンをやらせてもらって春と秋の関東インカレで優勝し、MVPに選ばれました。ビーチバレーは三年の時面白半分が出たんです。そうしたら関東大会で勝ってしまい、兵庫で行われた全国大会に行く羽目になってそこでも優

勝してしまった。その時の決勝の相手が今回のオリンピックでペアを組んだ徳野涼子でした。小学校時代からのライバルですと松山でバレーボールをやっていました。彼女は一年上で、大学は筑波大に進んだのですが、ずっと交流は続いていました。大学を卒業して彼女は松山の会社がビーチバレーのチームを作ると言うのでそこに進んだ。私も一年後、彼女の後に同じチームに入ったのです。

——そのチームは強豪で、当然オリンピックを目指すことになるのですね。シドニーは残念ながら代表になれなくて、アテネで夢を実現したわけですね。オリンピックの舞台はいかがでしたか。世界中を駆け巡っているのにオリンピックは違いますか。

楠原 まったく違いますね。開会式の入場を待っている間に、もう体が震えてきましたもの。何から今まで最高の舞台でした。

——その感激の原点は小金井ですね。

楠原 私は大学を出たら教師になりたいと思っていました。生涯スポーツ科でしたが教職課程も取って、

教育実習も行きました。二単位足りなくて免許はもらえませんでした。が……。私は4年間正門のすぐそばに下宿していてバレーボール部員の中でも学校が一番近かった。四年間その下宿と体育館の往復でしたから、小金井キャンパスは私の大学生活のすべてでした。ビーチバレーに出会ったのも大学時代だし、オリンピックの夢も小金井から始まったと言えます。

【メモ】

楠原さんは、アテネオリンピック出場当時は愛媛県松山市に本社のある「ダイキ」という水処理総合メーカーが所有するビーチバレーチームのメンバーだった。オリンピック後のそのチームに所属して世界リーグを転戦していたが、まもなく退団。神奈川のチームに移籍したりしたが、今では選手生活にもピリオドを打ち、故郷の松山に帰ってバレーボールの指導をしている。◆

(インタビュー・遠藤満雄)

# 栗山日本ハム監督は・・・

## 日本野球チームを真近で応援した

もう一人、選手ではないがオリンピックの会場にいて、ごく間近でその興奮を味わった人がいる。野球の栗山英樹氏である。栗山氏は一九九〇年（平成二年）にヤクルトスワローズを退団し、テレビ解説者、野球評論家として活動を開始していた時だ。一九九二年のバルセロナ大会から正式種目となった野球は、このアテネこそ金メダルと選手も日本国民も期待していたものだった（バルセロナ銅、アトランタ銀、シドニー四位）。プロ野球選手の出場も認められることとなつて、日本は最高のチームを作つて臨んだのである。栗山氏は評論家として、野球解説者としてアテネに出向き、専門の野球はもとより、オリンピックの雰囲気を感じた所だった。その栗山氏が、オリンピック観戦記を「アテネは感動のつぼだった」と題して、創刊号に寄せてくれたのである。その観戦記を抜粋する。

……

感想を一言で言う。「世界最高の舞台だ」ということに尽きる。たとえば、開会式。僕は聖火台のすぐ横のあたりで見たのだけれど、もうずうっと鳥肌が立っていた。今までに経験したことのないような興奮状態だった。観客席にいる僕がそうなのだから、あのグラウンドに立つて行進した選手はいかばかりであつたか想像するのは難くない。あの「狭い」空間に世界の

200以上の国や地域の人々が集まっているのだ。それもみんな仲良くである。こんなことつてオリンピック以外にはありえない。スポーツの意味を改めて考えさせられた。

……  
野球について報告しよう。結果は銅メダル。「残念」と思った人が多かったかもしれないが、ぼくはこんなにつらい気持ちで野球を見たのは初めての経験だった。確かに日本チームは金メダルを獲りに

行った。そのために万全の体制を敷いた。選ばれた選手が日本のトップばかりだったかどうかは別にして、あのチームは最高のチームだった。選手は全員が死に物狂いだった。みんな切羽詰まった気持ちでいた。それが痛いように伝わってくるので見ているこっちが息苦しくなってくるほどだった。日本に帰ってプロ野球を見たら、正直ほつとした気持ちになつた。

選手がどれほどの気持ちで臨んでいたのかを、ぼくが目撃したひ



アテネ五輪で入場行進する日本選手団



とつのシーンを例に挙げてみたい。  
キューバ戦のことだ。この試合  
の帰趨がメダルの行方を決定づけ  
るといい。マウンドには日  
本のエース松坂がいる。ランナー  
を背負い、ピンチである。打者が  
ファールを打った。審判は新しい  
ボールを松坂に投げ渡した。する  
と捕手の城島が、そのボールをこつ

込んだのだと思う。この城島の「入  
魂」が功を奏して、このシーン、  
松坂は投げ勝ち、そしてこの大事  
な試合をものにした。  
これほど一つ一つの細かいシー  
ンにも気を配って日本は戦った。  
それでも強いチームが常に勝つ  
のが野球ではない、ということを実  
証する結果となった。◆

ちによこせと松坂  
に要求した。ふだ  
んならありえない  
ことだ。松坂は渡  
されたボールを打  
者に向かって投げ  
ればいい。しかし、  
城島は松坂から  
ボールを受け取る  
と、そのまままた  
投げ返した。たぶ  
ん城島はこのとき、  
そのボールに日本  
チームの魂を吹き

## 2013年の栗山英樹氏にインタビュー

あれから十年。栗山氏は「北海道日本ハムファイターズ」監督という  
立場にいる。国立大学出身の初のプロ野球監督と大いに話題を集めた  
一年目、見事な戦いぶりでパシフィックリーグの覇者となったことは、記  
憶に新しい（「辟雍」第九号参照）。そして二年目の今年、彼は苦しみ、  
もがいている。その苦しみのさなか、この十号記念誌のために時間を割  
いてくれ、インタビューにに応じてくれた。

——十年前とはずいぶん立場が  
変わりましたね。監督になると  
いうことはあの頃から想定され  
ていたのですか。

栗山 監督を想定していたわ  
けではありませんが、いつ何が  
あってもいいようにという気持  
ちは、常に持っていました。

——監督一年目でパリーグ優勝、  
お見事でしたね。

栗山 その分今年苦しんでい

ます。選手たちは皆懸命にやつ  
ていて、みんな素晴らしい能力  
の持ち主なのに、僕がそれに応  
えてやれないでいる。申し訳な  
い気持ちでいっぱいです。今年  
の結果はすべて僕の責任なので  
す。

——昨年は辟雍会の北海道支部  
の総会に足を運んでくれました。  
みんな大変に感激していました。

栗山 野球部の監督から声を



かけていただきましたので、何  
わせていただきました。

—— 栗山さんの中には東京学芸大  
学というのが、今でも大きなもの  
として存在しているようですね。

栗山 それはそうです。昨年  
から監督という立場に立つてか

らも、国立大学出身の初めてのプ  
ロ野球監督：などといわれ続けま

したが、言われるまでもなく僕の  
中にもしつかりと分かっているこ  
ろです。苦しい時にこそ、学芸

大学時代の仲間のことを思い出し  
ますし、実際に会ったり、話した

りしてかづけてもらっています。  
昨年の北海道での集まりにも監  
督や仲間が集まると言うので喜  
んで出席させてもらいました。

—— 辟雍会が十周年になりました。  
東京学芸大学のすべての卒  
業生が集う組織です。

栗山 十年前にも申し上げた  
と思つのですが、そうした組織  
があるというのは素晴らしいこ  
とです。大学時代の絆というの  
は、何にも代えがたいものです  
からね。

インタビューは埼玉・西武球場  
での試合のために上京した折に、  
立川の滞在先で行った。シーズン  
大詰めの、それこそ血のにじむよ  
うな苦闘の最中であった。その苦  
衷をうかがわせるような、やつれ  
た表情の栗山氏だった。それでも  
母校のために会ってくれた。◆

(聞き手・遠藤満雄)



取材地立川の駅前

# 支部からの活動報告

## 群馬県支部設立される

### 経緯

実は、学生時代に私が所属していた研究室（生物学第一分野・指導教官故小林弘先生）の先輩に真山茂樹教授がおります。真山先生は、同窓会誌『辟雍』の編集者を長く務められており、ある日「何か文章を書いて欲しい」との連絡をいただきました。そこで『辟雍』五号に「地域の自然を見守る」と題して尾瀬の自然保護についての拙文を掲載していただいたのがきっかけで、「辟雍会」に入会しました。

その時以来、自宅へ送られてくる『辟雍』を拝読していますと、必ず「〇〇県支部設立」の記事が出ます。

当時、私が勤務していた高校からも数人が学芸大学へ進学しており、その時の生徒が、今年四月に教師として群馬県へ戻ってきてくれていました。個人的には、以前、知り合い

が集まって学芸大学の同窓会を行ったことがありましたが、将来的には、幼・小・中・高・大学・一般企業と勤務する群馬県に縁のある多くの同窓生に声をかけ、組織的な同窓会が開けないものかと考えていました。

### 「まず一回やってみよう」

そこで、知り合いの先生方と相談して、「まず、一回やってみよう」ということで動き出したのが今回の始まりです。

とにかく、完璧ではなくとも、誰かが最初に動き出し、まずはやってみなければ、その先は無い訳ですから。

学芸大学へ連絡をしますと、辟雍会長の鷲山恭彦先生には、大変喜んでいただき、様々な面でご協力をいただきました。そして、以前開いた同窓会の名簿や県教育委員会の関係



者名、知り合いから知り合いへと頼つての案内等によって一〇九名の同窓生を把握し、案内を送ることができました。

残念ですが高齢のために出かけることができないという大先輩や当日は用事があったて出席できないが次回は参加しますという回答も多数寄せられました。一方返事のない方も少なくありませんでした。

結局、群馬県支部への入会を希望する者が四五名、当日の総会・懇親会への参加者が二五名となりました。

## 設立総会 高崎の老舗旅館「豊田屋」で開かれる

二〇一三(平成二五)年七月二十七日(土)に豊田屋旅館(高崎駅前)で総会・懇親会を実施しました。

豊田屋旅館は、国登録有形文化財の指定を受けており、昭和初期には高崎第十五連隊に入隊した兵隊さんの家族が慰問に訪れた際に宿泊したという歴史を感じさせる木造建築です。辟雍会本部からは、会長鷲山恭彦先生、群馬県に縁のある芸術スポーツ

学系長・教授増田金吾先生、日本語日本文学研究講座教授大井田義彰先生、後藤満元課長など四名もの来賓をいただきました。

まず総会が開かれました。鷲山会長の挨拶、支部設立の経緯の報告に続き、支部長・幹事等の役員と今後の活動方針が承認されました。そして元県教委学校教育部長・上原隆充先生の叙勲の紹介等を行い、無事終了しました。大変忙しい中、群馬大学に勤務している教育学部障害児教育の金澤貴之教授、先端科学ユニツト放射線生物学の高橋昭久准教授も総会だけに駆けつけてくださり、総会の盛り上げに力を添えて下さいました。

## 人の縁の大切さを実感した和やかな懇親会

続いて懇親会に移りましたが、準備の間に名刺交換や昔話に盛り上がり、すでに懇親会に入ったかのような和やかに雰囲気となりました。

懇親会では、それぞれの自己紹介から共通の知り合いの多いことや、進

学指導で「学芸大すごくいいよ」と恩師に言われたという参加者も多く、人の繋がりと縁の大切さを感じさせられました。

参加者の間から「学芸大学だい好き人間の集まりだ」という言葉も聞かえ、参加者の多くが大学に誇りと愛着をもっていることを強く伺い知ることができました。

総会は十七時から、懇親会は十八時から始まりましたが二十一時が近づ

いて、遠方の参加者の帰り時刻が迫り、名残惜しく、全員での記念撮影(写真)となりました。どの顔もいい顔で、次回に繋がる楽しく充実した懇親会となりました。

次回も数多くの「学芸大学だい好き人間集まれ!」。

(群馬県立万場高等学校)

校長 須永 智



群馬県マスコット「ぐんまちゃん」

## 北海道支部

北海道支部は平成21年（2009年）、道内在住の東京学芸大同窓生の相互の親睦を図るとともに、広く教育及び文化の振興・発展に寄与することを目的として設立されました。

初代会長は鶴丸泰生氏（昭和39年体育科卒）を中心に、「辟雍」に込められた「明達諧和」な雰囲気大切にしながら、楽しく有意義な集いを積み重ね、今年で5年目を迎えました。

設立当初は会員名簿の作成に苦労しましたが、各方面からの協力をいただきながら同窓生の輪を広げ、現在は66名の会員で構成されています。毎年8月の第1土曜日に総会並びに懇親会を開催することになっていますが、総会では会長挨拶の後、支部規約の確認、「辟雍会」全国代表者会議報告、事業報告、会計・監査報告等を行っています。そして懇親会では、出席者全員の近況報告から始まり、ご指導いただいた恩師の思い出

や若き日に学友と切磋琢磨した数々のエピソードなどを披露し合い、同窓生としての「絆」を深めるとともに、お互いに新たなエネルギーをもらっています。

特に昨年は、プロ野球「北海道日本ハム」の栗山英樹監督（昭和58年体育卒）の「就任激励会」を開催し、大変盛り上がりしました（機関紙「辟雍」第9号参照）。北海道の広域性もあり、例年は15名程度の出席にとどまっていたのですが、当日は支部会員の半数に及ぶ33名とともに、東京学芸大野球部OB会役員の12名の皆さんにも特別参加していただき、改めて同窓の栗山監督への期待の大きさをうかがい知ることができました。

支部会員の多くは、大学、高等学校、小中学校で教鞭をとっていますが、民間企業等で活躍されている方もいます。またご勇退後、第二の人生を歩まれている会員の皆さんも、それ

ぞれのキャリアを生かしながら、学校教育・社会教育の分野、さらに地域におけるコミュニティ活動に積極的に携わるなど、まさに「生涯教育・生涯学習」を身をもって実践されています。

今後も支部設立の趣旨を踏まえ、会員相互の交流を一層活発に進めるとともに、支部のスローガンである「カムバック・サーモン！北の大地・北海道は、皆さんの凱旋を待つてまーす」の気持ちを大切にし、一人でも多くの後輩会員を温かく迎え、北海道支部のネットワークを広げていきたいものです。

設立10周年を迎えた「辟雍会」のますますの発展と全国各支部の会員の皆さんのご健勝を祈念申し上げますとともに、後輩諸君が母校の良き伝統を引き継ぎながら、それぞれの分野で活躍されることを心より願っております。

（北海道支部 会長 鶴丸 泰生）



# 青森県支部

私ども青森県支部は昭和六十二年に「東京学芸大学青森県同窓会」として発足し、本県に戻ってきたり、勤務をされている卒業生相互の交流を深めてきました。その後、辞雍会の設立に伴い、平成十五年に青森県支部(辞雍会の第一号支部)へと移行。支部移行後も、同窓会発足当時の目的・スタンスを踏まえながら活動を継続し、平成二十一年には支部会費の徴収を始め、また、支部として小金井祭に参加・出展をさせて頂くなど、活動の幅を拡げております。

現在、支部会員は五十一名。年二回(夏季・冬季)の総会・懇親会開催を活動の基本としつつ、辞雍会本部との連携による「地方でのイベント」の開催などを模索・検討するなど、支部としての充実を図って参りたいと考えております。

以下に、「支部移行後の活動概要」と「支部会員からのメッセージ・近況報告」を記載して、当支部からの活動報告とさせていただきます。

## 支部移行後の活動概要

- ▼ H 15・12・07 平成十五年度総会・同窓会開催
- ・辞雍会本部幹事長の池田義人氏がゲストとして出席
- ・青森県同窓会から辞雍会青森県支部への移行が承認される。
- (規約制定。同規約に基づく顧問・役員を選出)
- ▼ H 16・01・20 辞雍会本部から依頼のあった「卒業生による大学評価アンケート調査」を支部会員に対して実施。
- ▼ H 16・04月 大学新入生へ配布する辞雍会のパンフレットに、当支部会員(矢野事務局長・昭和六十二年D類保健体育科卒)によるコラム「北で結んだ絆」が掲載される。
- ▼ H 16・10・30 平成十六年度辞雍会全国代表者会議・第六回ホームカミングデーの開催に併せて発行された辞雍(辞雍会機関紙)創刊号に、当支部会員によるコラム「青森県支部のあゆみ(葛西守人支部長・昭和三十九年甲類社会科卒)」と「青森県同窓会に参加して(里村輝幹事・平成十年N類スポーツ科卒)」が掲載される。
- ▼ H 18・12・02 平成十八年度支部総会・懇親会開催(支部規約一部改正)。

## 役員改選)

- ▼ H 19・12・01 平成十九年度支部総会・懇親会開催
- ▼ H 20・12・06 平成二十年支部総会・懇親会開催(支部規約一部改正)支部会費徴収について承認
- ▼ 役員改選。平成二十一年度小金井祭への参加について承認。
- ▼ H 21・03月〜10月 小金井祭参加・出展に向けての打合せ(四回)
- ▼ H 21・08月 支部会員継続意向調査の実施、支部会員年会費徴収の開始
- ▼ H 21・11・01〜03 平成二十一年度小金井祭に青森県支部として参加・出展(青森県紹介パネル展・支部紹介冊子の作成配布・青森県物産販売)
- ▼ H 22・01・05 平成二十一年度支部総会・懇親会開催(小金井祭参加・出展についての報告 支部会員継続者の確認)
- ▼ H 23・01・08 平成二十二年度支部総会・懇親会開催(役員改選)
- ▼ H 24・01・07 平成二十三年度支部総会・懇親会開催
- ▼ H 24・07・28 平成二十四年度夏季支部総会・懇親会開催

- ▼ H 25・01・05 平成二十四年度冬季支部総会・懇親会開催(役員改選)
- ▼ H 25・07・28 平成二十五年度夏季支部総会・懇親会開催

(青森支部長 碓谷寿明)



左上から、猪股歳生(平成9年D類数学) 矢野政弦(昭和63年D類保健体育) 碓谷寿明(昭和43年・B類英語) 種市 哲(昭和45年・B類保健体育) 矢野朋子(平成2年・A類保健体育) 里村 輝(平成10年N類生涯スポーツ) 西澤ななえ(平成10年・D類音楽) 佐保美幸(昭和61年・B類数学) 前列着席、浦郷綾子(昭和54年・D類書道) 對馬礼子(昭和46年・C類養護学校教育) 前田千加(昭和48年・院美術)(年度は卒年)

## 青森県支部 顧問・役員

平成25年1月～(2力年)

### 顧問

三浦敬二郎

昭和28年卒 乙類英語

### 支部長

碓谷寿明

昭和43年卒 B類英語

### 副支部長

種市 哲

昭和45年卒 B類保健体育

對馬 礼子

昭和46年卒 C類養護学校教青

青森県視覚障害者情報センター

### 幹事長

矢野 政弦

昭和63年卒 D類保健体育

公益財団法人青森県体育協会

### 幹事

佐保 美幸

昭和61年卒 B類数学

青森市立佃中学校

高木 徹

平成3年卒 A類数学

青森市立油川小学校

猪股 歳生

平成9年卒 D類数学

青森市立浅虫中学校

宮重 太一

平成11年卒 A類数学

青森県立八戸高等学校

### 事務局長

里村 輝

平成10年卒 N類生涯スポーツ

県立青森高等学校

### 会計監事

矢野 朋子

平成2年卒 A類保健体育

青森市立浪岡南小学校

山本 陽子

平成22年卒 B類書道

県立青森高等学校

## 新潟県支部

2009年11月8日に大勝直行さん(昭和52年卒A類保健体育科)が音頭を取り、当時の辟雍会長谷川貞夫会長様、柴田義晴副会長をお迎えし、新潟県支部準備会を実施したが、わたしも新潟県支部のスタートでした。わたしは、インフルエンザで参加できず大変残念な思いをしたのを思い出します。

その後、2010年2月14日に第2回目の準備会を実施し、事務局が大勝さんからわたし木澤に引き継がれました。その後は、わたしの行政への異動もあり、なかなか立ち上がり

りの会を実施できずにいましたが、鷺山恭彦会長様のたびたびの激励を受け、準備会に集まった会員に呼びかけ、5人という規準を満たし、新潟県支部として産声を上げたのは、2011年8月28日のことでした。

当日は、鷺山恭彦会長様と筒石賢昭組織部長様をお迎えし、総勢17人での立ち上げでした。

お二人の激励のお話と、自己紹介から出てくる東京学芸大学の同窓生だからこそ単語・地名・施設名の一

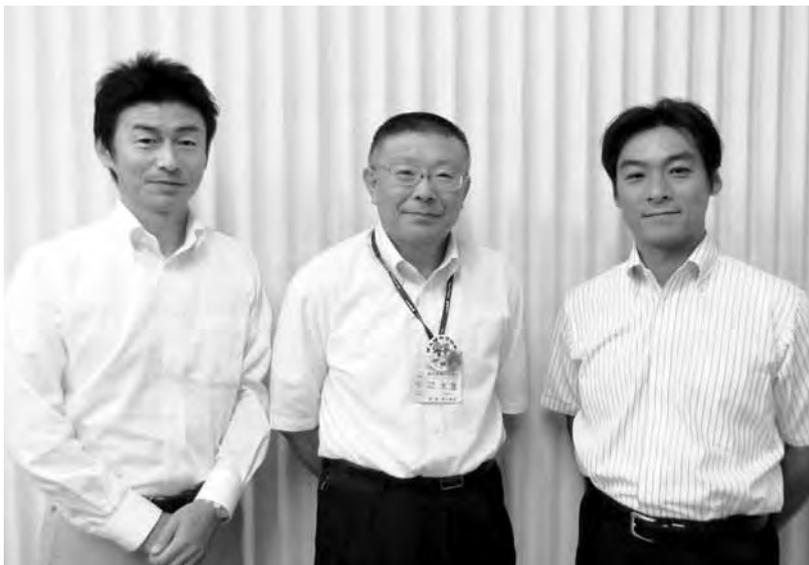
つ一つ、そして歴史的な会話、何よりも筒石組織部長様の指揮で、みんなで歌った学生歌「若草もゆる」は今でも心に残っています。

2012年は、機関等に問いかけたの在県の卒業生名簿の洗いだしに取り組むもののなかなか進まず、活動といえば、研究会等で合った際に声をかける程度で、招集のかかる理事会に参加するだけが唯一の活動らしい活動でした。

しかし、10周年を迎えた今年度は、行政や中体連関係で割愛されていた気心の知れた後輩が、復帰し、3人で事務局という組織ができあがりました。

現在、各自にルートを使って、卒業生の洗い出しに取り組んでいます。今年度中には新潟県支部同窓会を開催しようとして、辟雍会への新規入会30人を目標に定期的に連絡を取り合っ

て活動を進めています。事務局が申し訳なく思っているのは、2008年から今年の3月までに学部を卒業して新潟県に在住の会



写真中央 会長（兼事務局長）木澤英二 昭和57年卒 B類-理科  
 写真左 事務局 田村 篤 昭和60年卒 A類-国語  
 写真右 事務局 松嶋 一 平成5年卒 B類-保健体育

員に何もしてやれずにいることです。もう少し時間をください。新潟県支部は、まだ3歳児です。5歳になる頃までには、基盤のしっかりした、会員が「楽しい、豊かな」思いのできる支部にします。

楽しみにしててください。  
 （新潟県支部事務局長兼会長兼務 木澤 英二）

### 連絡先

〒959-0492  
 新潟県新潟市西蒲区旗屋585番地  
 1 新潟市立総合教育センター内  
 木澤英二（新潟県支部事務局）  
 TEL 0256-88-7444  
 FAX 0256-88-7517  
 メール 7131kizawa@gmail.com

### 新潟県支部

#### 役員名簿

**会長**  
 木澤 英二  
 （事務局長兼務）  
 昭和57年卒  
 B類理科

**事務局**  
 田村 篤  
 昭和60年卒  
 A類国語

松嶋 一  
 平成5年卒  
 B類保健体育

### 千葉県支部

平成13年度から5年間の準備期間を経た後、平成18年度に発足した千葉県支部です。現在の拠点は、船橋市ですが、会員数約30名の組織になりました。県下には、平成16年度から多数の辞職会員が就職に就かれたり、企業で活躍されていたり聞いています。そのため、その方々の入会を含め組織拡大が、本支部の喫緊の課題となっています。なお、千葉県には、本支部以外にも高校教職員による同窓会等があると聞いています。それらの会と交流を深め、統合することも検討中です。

支部としての主な活動は、平成22年度から年間1回の総会と懇親会の開催であり、現在もこれが中心です。会員には、すでにご退職されました会長から、教職3年目の若手教員と幅広い年代の方がいますので、総会後の懇親会では、キャンパスの様子や在学中のエピソードばかりでなく、現職の方からの職場における相談を受けることもおこなっています。そして、総会に参加された方は、次

度の総会に新会員を誘ってくるという課題も出され、会員一丸となって横のつながりを図っているところで、会員の増加にともなう今後の活動として、会員による研修会等も検討されています。

総会と懇親会の開催は、これまで7月でしたが、平成26年度からは、9月末の土曜日実施の運びとなります。現在も船橋市の教職員が中心ですが、柏市・松戸市・千葉市の会員も加わりました。そして、新たに市川市・山武市の方も会員になりました。



組織拡大（事務局長と山武市の会員）  
 左から、石井 康雄 昭和57年A数学卒  
 薩佐 久仁子 昭和58年B職業卒

本支部の難題は、卒業生の所在がなかなかつかめないために、人から人へと頼りながらの地道な拡大を図っていることです。本紙をご覧になりました卒業生や会員の皆様におかれましては、当支部事務局長まで一報をいただけましたら幸いです。

## 役員名簿連絡先

### 会長

島 聰

〒274-0060

船橋市坪井東5-9-23

TEL047-457-3114

### 副会長

松本 淳

〒273-0113

鎌ヶ谷市道野辺中央3-10-11

TEL047-445-9966

### 事務局長

石井 康雄

〒273-0042

船橋市前貝塚町1010-18

TEL047-438-9380

### 事務局

吉村 淳一

〒116-0014

荒川区東日暮里5-6-7-1401

TEL03-3805-7277

### 事務局長

石井 康雄 (船橋市立丸山小学校勤務)

TEL047-438-9380 (自宅)

TEL090-3472-3788

(携帯)

メール [ishaso-fuku@ezweb.ne.jp](mailto:ishaso-fuku@ezweb.ne.jp)



第1回 総会懇親会風景 右から、会長 島 聰 昭和43年A数学卒 清宮 義隆 昭和57年A学教卒  
鈴木 裕子 平成22年理科 大学院卒 北岡 孝司 昭和57年B数学卒 長堀 幸朗 平成3年B理科卒

# 神奈川県支部

歴史ある開港の地

神奈川は逞しく歩む!!

神奈川在住の副学長 大竹美登利  
先生を顧問に役員組織も構成され支部として動き出しております。しかし、神奈川県には同窓会としての組織が、長い歴史の基それぞれの地区ごとに存在しています。「辟雍会」神奈川支部としての位置づけと関連づけに会員一同、力を合わせ尽力して参ります。

## 【同窓会への期待】会員の声

★神奈川県内の教員採用情報、教育実習受入校の本音をお聴きできれば幸いです。  
★まだまだ経験が浅いのですが、先輩方と交流し多くのことを学べたらと思います。よろしくお願ひします。  
★昨年の第一回に参加させていただき、とても貴重な時間を過ごし、同窓会の素晴らしさに感激いたしましたおりました。ありがとうございました。

今年もよろしくお願ひ申し上げます。

★現在、金融機関で働いておりますが、教員になりたいと思うようになってきましたが、いきなり教員として働くには力はないので、どうしたら良いのか先輩方からは非お話が伺えたらと思っております。よろしくお願ひ申し上げます。

★盛会をお祈り申し上げます。

★H24・1.7のミュージアムでのソプラノコンサートではお世話になりました。本人はイタリアのフィレンツェ音楽院で学んでいます。

★取りまとめお疲れ様です。また都合が付くときに参加させていただきたいと思ひます。

★相互の親睦、情報交換と教育研究(母校の)振興、支援を図るためには、同窓会神奈川支部の中に懇親づくりグループ(例えば、スポーツ同好会、趣味同好会等)をつくり、情報交換の場づくりを期待します。

★「辟雍」が送られる度、同窓会が情報発信してくださっていることに感謝しています。どんな方が同窓会から知らせていただけると嬉しいです。  
★都合により出席することができません。

今後の神奈川辟雍会の活動に期待しています。

★当日は所用があり欠席させていただきました。この会のこれからのご発展をお祈りしています。

★ご案内を大変ありがとうございました。当日あいにく都合がつかず出席できないのが残念なのですが、会えますますの発展を祈念いたしております。

★ご連絡ありがとうございました。出られなくて済みません。

★忙しくなかなか伺えませんが、ご連絡を頂けますのは、大変嬉しいです。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

★5年に一度ぐらい学芸大学の卒業生4人で集まります。しかし辟雍会は3人は知りませんでした。3人とも千葉、茨城ですが、他の人たちは全国に散らばっている現状です。住所も分かりません。皆専業主婦や、4年ほど前教師を辞めております。現実50代はこうなのでしよう。



※会員の声を理解し「辟雍会」神奈川支部として、卒業生が現役の学生の将来の展望が開けるように支援するという事に努めます。もちろん自分たちの生き方も高められるよう、様々な出会いの場を考えていきたいと考えています。

(神奈川支部 事務局長 立花徳子)

# 山梨県支部

## 第2回目を

迎えて継続へ・・・

去る8月16日、本県のほぼ中心に位置する笛吹市において、第2回目の同窓会を開催致しました。昨年の記念すべき支部立ち上げを礎にして、スムーズに事は運びました。本県は、実は、首都圏内の1つとして数えられているのですが、今ひとつ東京に遠いイメージがあるのです。しかし、学芸大学より中央本線1本で県内に来ることができ、石和温泉駅の近くで開催するのですから、2回目とはいえ同窓会理事長の鷺山先生が来てくださることを熱望しておりました。思いは通じたのか、先生は中国北京から帰国したばかりの足で来県してくださいました。

きました。東京での様子や県内各地からの情報を得て、教育通になった気分です。また、20代から70代の方の様々な考えも聞くことができ、学校現場とはまた違ったオープンな雰囲気が出されている感じもしました。ふと考えますと、学芸大学自身にそのような校風があり、受け継がれてきているのではないかと思ったりもしています。

毎年、夏休みには県の教育センターにおいて研修会が行われていますが、今回も本会に参加されている学芸大学で音楽科講師として活躍されている方が、音楽科研修に和楽器・琴体験学習の講師として教職員に指導をされているということが判明いたしました。来年夏には、ご指導を受けることが出来ましたらどんなにうれしいことでしょう。(受講者は学芸大学出身者を優先してほしいくらいです。)

また、様々な県内の研究会に講師として招かれる学芸大学在職中の先生方も大勢いらっしやいます。最先端の研究の話をお聞きしながら、大学に思いを馳せ、出身校を誇りに思

いつつ、少しでも実践していければと思つていきます。

過去の大学名簿を見ますと、まだまだ県内には大勢の同窓生がいっぱいいます。教育に携わっている如何にかかわらず、様々な分野の方が集まって話ができたらと思います。そしていつの日か、会として何かできたらいかなと個人的に思つているところであります。

## 静岡県支部

### 3年目の静岡辟雍会

#### 「平成25年度総会の日」

静岡辟雍会が発足したのは一昨年(H23)3月、東北大震災から二週間目でした。

未曾有の大震災の衝撃を背負いつつ、「静岡辟雍会」立ち上げに賛同し参集してくれた同志60名(昭和21年度卒く平成20年度卒)。設立総会の後、現況を含めての自己紹介は予定時間をはるかに超越し大いに盛り上がりました。そこには一人一人の母校を想い「静岡辟雍会」設立を喜ぶ、熱

意と希望の結晶が煌めいていました。

あれから二年半。静岡を象徴する富士山が世界遺産に登録された年、静岡辟雍会は節目の三年目を迎えて喜びが一層拡大されました。

その三年目の「平成25年度静岡辟雍会総会・講演会」が、去る8月24日午後、厳しい残暑の中、東京学芸大学辟雍会鷺山会長はじめ34名が出席し、富士山を眺望できる三島市のZ会文教町ビルで開催されました。

#### 当日の次第

14:15～14:45 大岡 信ことば館見学  
15:00～15:35 平成25年度静岡辟雍会総会  
15:40～16:45 講演「教育界への想い」  
17:00～19:00 懇親会

事前に、希望者20名が見事な芸術的室礼の「大岡信ことば館」を館長さんの解説付きで見学させていただき、大岡さんの偉大さを実感するとともに言葉(詩)という表現手段の妙味を体感しました。



そうこうしているうちに、三々五々3階の会場に会員が集合し始め、久しぶりの再会を喜び合っている姿が目立ちました。予定通り15:00には総会を開会しました。

恒例の前年度事業・決算報告、25年度の予算・事業計画が承認され、本年度メインの役員改選の議事に入りました。といつてもなかなか難しく遠藤現会長から本部案が提案され全員の賛同を以って新役員が決定しました。そして「若草萌芽ゆる」を斉唱して総会終了。

## 次期役員

### 会長

武藤葉子（現事務局長）

昭和47年A保体卒

### 副会長

(東) 鈴木隆正 昭和56年D保体卒

(中) 大石茂生 昭和52年A保体卒

(西) 小川洋子 昭和49年B国語卒

### 事務局長

勝田敏勝（現副会長）

昭和51年A国語卒

### 事務局次長

豊島元江（再任）

昭和47年D保体卒

高橋裕一（現会計監事）

昭和59年A保体卒

### 会計監事

村松一寿（再任） 昭和60年A保体卒

村松岳詩 平成5年A理科卒

次は、この三年間パターン化した外部講師による『講演』。今年は前Z会社長・現静岡県教育長職務代理者「加藤文夫」氏をお招きして、『教育界への想い』と題してのご講演を頂戴しました。生い立ちやご経歴、現在のお仕事や思いを中心に語

られ、「人間として持続していかなくてはいけないものは二つ (1) DNA (2) 教育 である」・「今や、家族の迫害や偏見から子供を守るのは教師しかない。そのできる包容力を身に着け果敢に立ち向かってほしい」と現職会員への応援歌、退職後会員への激励歌をたっぷり拝聴しました。

最後は加藤氏を交えての『懇親会』。加藤氏の講演の更なる深淵部をお聞きしたり、久しぶりの同級生との会話に花を咲かせたり、会員の近況報告を聴いたりして二時間大いに盛り上がり、また来年の総会での再会を約束して其々帰路に着きました。

今年も松本や横浜から出席してくださったお二人の「この会には特別の想いや魅力があるので、何があってもまた来年出席しますよ。」の言葉が今も脳裏に色濃く焼き付いて離れません。事務局長冥利に尽きる何よりも有難いお言葉でした。

静岡辟雍会は、本年度新たに加入された会員を含めて現在会員数75名です。

三年ひと区切りの今年。規約第三条



「本会は、会員相互の親睦を図るともに、広く教育及び文化の振興・発展に寄与することを目的とする」をどう深化・発展させていくか？

60名でスタートした会員が三年間で75名に増加したけれど、まだまだいる静岡県に関わる学大卒業生・修了生をどのようにして入会いただくか・・・。パターン化した総会日程の今後のあり様等、いくつか課題が浮き彫りになってきている現在であります。

(静岡辟雍会事務局長 武藤葉子)

# 富山県支部

## 「獅子の会」

### 辟雍会富山県支部の活動

富山県では例年8月に、「獅子の会」(辟雍会富山県支部)総会・懇親会を開催しています。今年は8月23日(金)に開催しました。

会は、簡単な総会の後、すぐに懇親会です。今年も31名の参加者がありました。初めて参加される方も毎年、数名いらっしゃいますが、自己紹介では、「校長先生が学芸大出身者で、誘っていただきました。」「学芸大出身の〇〇先生に担任していただきました。」など、一段と仲間との絆が深まりました。ご夫婦での会員も何組もいらっしゃいますし、数年前からは親子での参加もあり、ますます充実した会となっております。今年は写真の中央にあります、富山県支部の旗を作成し、文字通り「獅子の星座の旗の下」に集う会となりました。

さて、富山県のこの「獅子の会」は、昭和50年頃に、親しい仲間数名の不定期な集まりから始まったそうです。その後、平成2年に名簿を作成して以来、毎年、総会を開いています。今年度の県内

在住の名簿搭載者は266名となっております。

このような会が発足し継続してきたのは、「人の力」によるところが大きいのではないかと思います。草創期から関わっておられる、元会長の大岩久七先生(昭和47年国語科卒)、前会長の石上正純先生(昭和49年保健体育科卒)を始め、案内を作成配付してくださった歴代事務局の方々の努力があったからこそだと思います。「よし、やろう!」と声をかけるリーダーがいて、それに応え、手伝うフォローがいらっしゃったからではないかと思えます。がんばっている人の「意気を感じて応援する心」は、私たちが大切にしていかなければならないものの一つではないでしょうか。

また、このように長く続けてこられた一つの

要因に「制約が少ない」こともあるのではないかと思います。何のしがらみもなく、とにかく「同窓の者が年に一度集まって楽しく語り合おう」という趣旨がよかつたのではないかと思います。ただ、問題点もないわけではありません。当面の問題は、「県内卒業生の把握が難しい」ということです。また、学校関係者はそれなりに分かるのですが、一般企業の方はほとんど把握できないのが実情で、現在は「あの人も卒業生だよ」

という口伝えの情報に頼るしかない状態です。しかし私たち「獅子の会」(辟雍会富山県支部)は、これからも同窓の人の輪を大切に、少しずつ広げながら、未永く会を育てていきたいと思っています。

獅子の会(辟雍会富山県支部)  
事務局 草野 剛(平成2年国語科卒)

#### 平成25年 獅子の会 (東京学芸大学辟雍会富山県支部)

総会参加者名簿 H25. 8. 23

S47年・国語科	大岩久七	立山町教育委員会
S47年・国語科	田形京子	
S49年・保健体育科	石上正純	
S49年・数学科	高橋恵美子	
S51年・理科	野村啓子	富山県女性財団
S52年・書道	稲垣宗之	
S53年・保健体育科	久保雅則	富山市立大沢野小学校
S54年・国語科	宇賀田瑞子	富山市立鶴坂小学校
S55年・学校教育科	市田克次	富山市立鶴坂小学校
S55年・理科	田島 寛	南砺市立福光東部小学校
S56年・国語科	大野きよみ	高岡市立成美小学校
S56年・保健体育科	高畠和美	富山市立広田小学校
S56年・音楽科	柳原正子	
S58年・社会科	吉藤重弘	富山市教育委員会
S58年・保健体育科	岩田万里子	立山町立立山中央小学校
S59年・保健体育科	坂口 恵	富山市立杉原小学校
S60年・国語科	上坂一弘	富山県教育委員会
S60年・理科(院)	堀田 充	富山市立和合中学校
H 元年・学校教育科	橋場映子	富山市立大久保小学校
H 2年・国語科	草野 剛	立山町立立山小学校
H 2年・保健体育科	山谷大有	富山県教育委員会
H 3年・国語科	竹内潤子	N T T
H 3年・社会科	牧田 隆	富山市立山田小学校
H 3年・数学科	舛田武彦	立山町教育委員会
H 3年・保健体育科	楠 康司	滑川市立北加積小学校
H11年・数学科	前田正秀	富山大学人間発達科学部附属小学校
H11年・教育情報科	伊東 学	射水市立射北中学校
H14年・社会科	眞田裕人	南砺市立福光東部小学校
H18年・理科	鷹西智子	富山市立鶴坂小学校

## 岡山県支部

### 「岡山辟雍会三年目」

東京学芸大学岡山辟雍会は、二〇一〇年に発足し、はや三年目を迎えました。今年、平成25年1月26日(土)に定例の総会を岡山駅前ホテルグランヴィア岡山にて開催しました。30数名の参加をいただき、会計報告、行事報告などが行われ、懇親会もなごやかな雰囲気年代を越えて楽しいひとときを過ごすことができました。今年も総会に出席できない方からの要望があり、5月18日(土)に懇親会を開催させていただきました、たいへんお忙しい時期ではありましたが、14名の方にご参加いただきました。どちらの会も、会員相互の交流が活発で、近況を語り合ったり、仕事でのさまざまな出来事などもお互いに話ができ、有意義な会に育っているものと思います。

また、会としての活動をする中で、会員の慶弔については、特に事務局に連絡をしていただき、会全体としてのお祝いをし、また、お悔やみをさせていたただくということも、会として会員相互の人としての繋がりを大切にしていきたいと考えています。

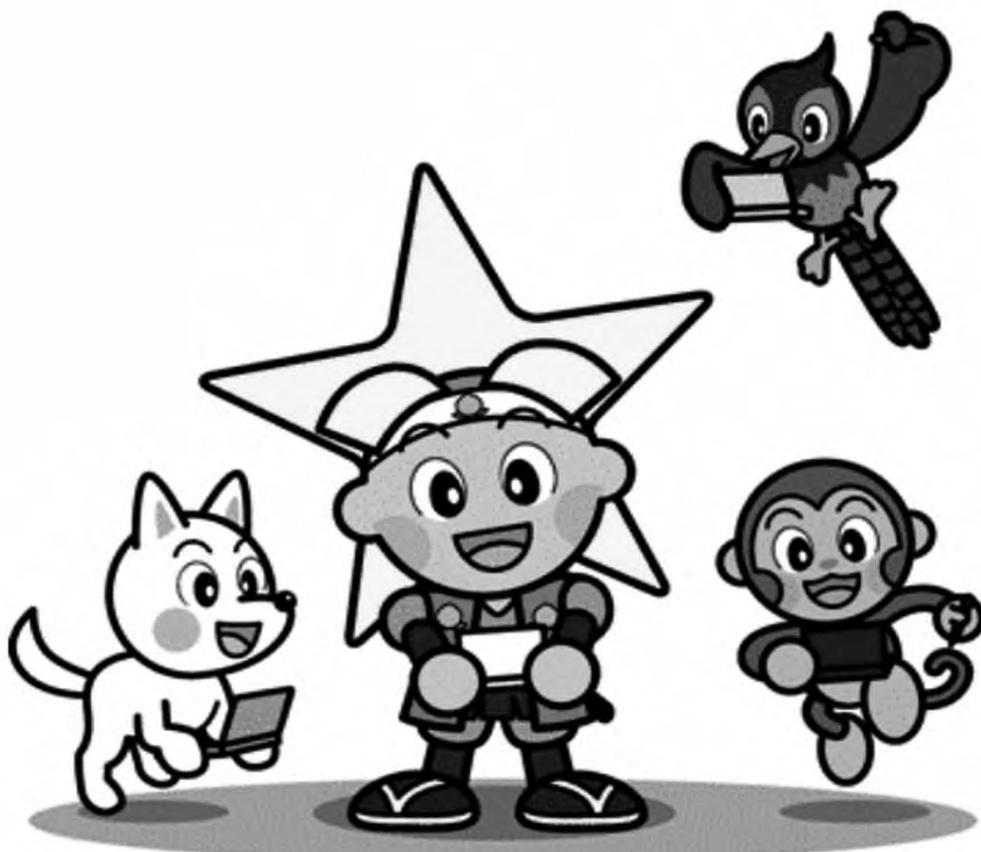
さて、今年の夏は、岡山辟雍会にとつて

二つのおめでたい事がありました。一つ目は、事務局長の宰相裕一先生が指導されている金光学園中学校が第35回全国中学校軟式野球大会に出場され、一回戦奈良県の八木中学校に勝利し、二回戦で神奈川桐蔭学園中学校に惜しくも敗れました。岡山県の中学校野球で優勝され、全国大会に出場されたことは、たいへんな栄誉でありました。二つ目は、私ごとではありますが、私の指導する岡山県立玉野光南高等学校が第95回全国高等学校野球選手権大会に出場したことです。残念ながら、一回戦で青森県代表の弘前学院聖愛高等学校に敗れてしまいました。この素晴らしい二つの喜ばしいことに対して、岡山支部として心よりお祝い申し上げます。

私も宰相先生も東京学芸大学硬式野球部で四年間の野球を通じて成長させていただきました。大学で学んだことを教育現場で発揮できるよう日々の教育活動に取り組んできました。今後も学芸大で学んだことを活かし、がんばっていきたくと考えています。以上、活動報告とは少し異なりますが、岡山支部の現在までの状況とさせていただきますと思います。次回、平成26年1月25日(土)場所は、岡山駅前、ホテルグランヴィア岡山での第四回岡山辟雍会の開催に向けてさらな

る前進を期待しています。インターネット等、いろいろな情報を使って全国辟雍会、岡山辟雍会が益々発展していくことを祈念しております。

(岡山県支部会長 竹内仁志)



岡山県マスコット「ももっち」

## 鳥取県支部

鳥取県では平成元年に「東京学芸大学鳥取県同窓会」を立ち上げ、今年で25年になります。3年前からは辞職会鳥取県支部として活動しています。内容は毎年1回、20人から30数人が集まっただけの懇親会、これを25年続けてきました。会員としての会費を集めているわけではなく、この懇親会の参加費の中から次回の案内のしがき代などを捻出しています。運営に当たっては、東部地区、中部地区、西部地区の3地区の持ち回りで開催しています。開催時期や内容は各地区の世話人を中心にそれぞれの地区が企画し運営していますが、10回、20回と節目の会は、全県から集まりやすい中部地区で開催しています。今年度も25年目ということと中部地区、JR倉吉駅前で開催しました。

県同窓会ではこれまで会員研修の一環として、10周年記念大会では栗山英樹さん（皆さん御存知の現プロ野球北海道日本ハムファイターズ監督）をお招きし、選手育成についてお話をうかがいま



した。当時は野球解説者として活躍中でしたが、本県同窓会に学芸大の野球部で栗山さんの先輩にあたる方があり、そのご縁で遠路お越しいただきました。また20回大会には、当時の鷺山恭彦学長（現辞職会会長）をお招きし、我が国の教育課題についての講演会も開催しました。懇親会が中心ではありませんが、少しずつ研修を取り入れています。25周年にあたる今年度も講演会を計画しました。当初、本会の会員で永年にわ

たり地元三朝町の国宝三徳山投入堂の研究を重ねてこられた建築士の方にその研究の一端を紹介していただく予定にしていました。あの不思議な建物がどうやって造られたのか、当時はどんな色だったのか、貴重なお話が聞けるものと思っていました。

ところが、この夏の猛暑の中、急に体調を崩され実現できなくなりました。ご回復を待って近いうちにぜひまたお願いしたいと思っています。講演会は急遽予定を変更し、無理を言って小谷次雄会長にお願いしました。参加者の多くは現役の教員でしたが、小谷会長の教員として、また地区公民館館長としての実践を元にした講演から、学校教育と社会教育が連携しながら子どもたちの生きる力を育むことの大切さやその具体的な方法を学びました。そして、その後はいつものように飲んで、駄弁つて、英気を養いました。今回のように会員の中から講師を立てて研修するのも意義深いと感じました。今後毎年1回集まり、情報交換や研修を続けていきたいと思っています。



## 島根県支部

### “縁”を紡ぐ同窓生

島根県で最初に同窓生の連絡をとられたのは、故江村幹雄氏でした。しかし、そのときは無精のせいで、お会いすることができませんでした。しかし10年後、縁あって僻雍会より島根県の連絡係を依頼された際、名簿を作成する折りにお会いすることができました。「島根県の学芸大学同窓会を立ち上げようとしています。」とお話すると、すごく喜んでいらつしやった笑顔を今でも覚えています。しかし、島根支部の立ち上げは困難でした。元々、島根県から学芸大学に進学する学生はわずかで、現役時代すら繋がりも少なく、卒業後も出会いは希。その上、個人情報保護法が壁となつて情報が集まりませんでした。ようやく出会えて名簿に載せていただいても、僻雍会に入会することに首を縦に振っていただけなかったのです。



H24.02.21 後列、玉林、梶谷、斎藤、加賀 前列、奈良井、稲田、杉元、上田ちひろ

それでも、古い名簿を頼りに連絡を取ることができ、約40名の方が仲間に入ってくださいました。そして、杉元 邦太郎氏に支部長になっていただき、平成18年2月に、第一回

の島根の学芸大同窓会を開くことができました。この時は正会員が足りなかつたため、正式に支部とはなつていませんでしたが、10名ほどの方が集まつてくださいました。30代から退職された方まで、初めてお顔を合わせる方ばかりでしたが、何とも言えぬ心温まる懇親会となりました。世代を超える同窓（学芸大）の“縁”の力を感じた次第です。

その後は、大学まで出かけて、現役学生に呼びかけて国分寺で『島根の会』を開きました。そして、若い人たちが僻雍会に入会してくださつたお蔭で、平成21年、ようやく正式に島根県支部として承認される運びとなりました。それを受けて、故江村氏へのご報告を兼ねて、西部の会を開きました。集つた人数はわずかでしたが、学生時代の話題を織り交ぜながら話が弾むとても和やかな会となり、そこでも同窓の“縁”を紡ぐことができました。



H21.11.07 西部の会 佐々木、玉林、小林、山本  
低解像度写真のみ現存



H20.10.30 学生たち



H21.02.21 学生たち

翌年、正式な総会を開き、隔年で総会を開く形で今に至っています。島根は東西に長く、一堂に会するには不都合があるので、今後東と西とで開催していくことになる

うかと思っています。現在、会員数は53名となりました。集まる人数は多くなくとも、確かな「縁」でつながっている力を感じながら島根の会を続けております。

今年、島根は縁結びの社、出雲大社の大遷宮の年をむかえました。現役の学生や、未だ会えていないOBの方々との「縁」をさらに紡いでいきたいと考えています。

【役員名簿】

- 支部長 杉元邦太郎
- 副支部長 玉林 尚之
- " 上部 孝雄
- 理 事 齋藤 尚文
- " 山本 芳正
- " 佐々木 伸
- " 内田 学
- " 矢富 克成
- " 梶田 勝造
- " 内田裕美子
- 監 事 小林 信
- " 奈良井 正
- 幹事長 加賀 理夫

東京学芸大学辟雍会

島根県支部

連絡先

〒690-0834  
 松江市朝酌町1-15 朝酌小内  
 電話 0852-39-0202  
 FAX 0852-39-0680

自宅  
 〒690-0872  
 松江市奥谷町6-5  
 電話 0852-22-3288  
 携帯 090-4579-0034

【島根県 OB名簿】

加賀 理夫	S33.02 理科	片廻 匡範	S42.05 理科
齋藤 尚文	S34.05 社会 A	名越 顕秀	S42.07 社会
玉林 尚之	S34.05 体育 A	神原 千亜紀	S43.11 体育
山口 妙子	S35.04 養護	佐藤 栄里子	H5 卒 体育 A
藤松 均	S35.06 保体	荒川 朋子	H6 卒 生活科学
福島 稔夫	S36.03 数学	内田 裕美子	H10 卒 体育
原 正嗣	S36.04 理科	内田 学	H13 卒 体育
梶田 勝造	S36.10 社会	矢富 克成	H14 卒 体育
大森 孝志	S36.11 理科	中村 孝貴	H20 卒 数学 A
奈良井 正	S37.01 理科	島田 奈名子	H21 卒 美術 B
玉木 康之	S38.05 社会よ	谷口 一真	" 体育 B
佐々木 伸	S39.03 数学	齋藤 正紀	H22 卒 生涯又
上部 孝雄	S39.07 体育	大本 倫太郎	" "
小林 信	S39.10 理科	上田ちひろ	" 理科 A
糸賀 昭雄	S40.02 数学	長岡 紗都子	H23 卒 文化財
竹下 浩	S40.04 数学	藤原 浩志	" 数学 B
渡部 正人	S40.11 数学	久保 彩香	H24 卒 理科 A
山本 芳正	S42.03 社会 A	松尾 亮佑	" 美術 B

【辟雍会正会員名簿】

- 副支部長 玉林 尚之
- 理 事 齋藤 尚文
- " 山本 芳正
- " 佐々木 伸
- " 内田 学
- " 内田 裕美子
- " 矢富 克成
- 卒業生 中村 孝貴
- " 島田 奈名子
- " 谷口 一真
- " 齋藤 正紀
- " 大本 倫太郎
- " 上田 ちひろ
- " 長岡 紗都子
- " 藤原 浩志
- " 久保 彩香
- " 松尾 亮佑

## 高知県支部

### “縁”を紡ぐ同窓生

私は大学を卒業して、平成2年4月より高知県立高等学校教員として教員生活をスタートさせました。記憶がさだかではありませんが、それからすぐに、現在高知県支部長の山岡和興氏（一九六三年度甲類理科卒）から連絡があり、同窓生数人で懇親会をした記憶があります。当時は教職員名簿などに住所、年齢、出身大学が掲載されており容易に連絡を取ることができました。自分も、その名簿を見ながら“東京学芸大学”の文字があると、高知県にも同窓生が少しはいることを、うれしく思ったことでした。

（詳細は辟雍四号）「高知支部設立へむけて」きっかけはドイツ語と理髪店」に掲載しています）高知県内の同窓生にも伝わり、平成19年6月24日、鷺山恭彦学長（当時）と自然科学担当教授 金沢育三氏の2名を迎え、高知県内在住の卒業生15名が集まり、辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）高知支部を設立することになりました。それから、多くの同窓生より情報をいただき高知県内には70名程の同窓生がおり、現在40名程の方々と連絡がつくようになっていきます。年に一度同窓会を開催することを目標にがんばっています。

最近では、平成25年3月3日に同窓会を開催しました。

出席者は、一九七三年卒D類保体科 宮地彌典、二〇〇四年卒B類英語科 下村真知子、一九九四年卒A類数学科 田所良夫、一九八五年卒D類数学科 黒瀬忠行、一九七五年D類書道科 大西正子、一九九〇年卒B類数学科 松山 幸、一九八八年卒A類保体科 宇賀孝篤、一九八九年卒D類保体科 西内一人、一九九〇年卒D類数学科 中山泰志の10名でした。

今回の同窓会は、一九八九年卒D類保体科 西内一人氏が監督をしている土佐高等学校野球部が、第85回センバツ高校野球21世紀枠でみごと20年ぶり7度目の出場を果たしましたお祝いも兼ねてのものでした。

たった10名の集まりでしたが、欠席連絡の方々が20名おられ、そのなかには心あたたまるメッセージが多く書かれていました。現在、このように多くの同窓生と連絡できたり、集まって懇親会ができる支部ができたことに本当に感謝しなければいけません。

最後に、本年度をもちまして、高知県支部長の山岡和興氏が退任されることになりました。言葉では言い尽くせないほどの感謝のべなければなりません。本当にありがとうございました。

これから新たな支部長を決め、辟雍会（東京学芸大学全国同窓会）高知支部の活動を継続させていき、高知県内同窓生の交流と親睦を図っていききたいと思います。



# 各部活動報告

## 事業部

辟雍会事業部は次のような事業を行っています。

### 1. 特別企画「辟雍会創立10周年記念パーティー」

辟雍会創立10周年を記念して「辟雍会創立10周年記念パーティー」を11月2日ホームカミング終了後に国分寺駅ビル「ホール」にて行います。

### 2. ホームカミングデー支援事業

東京学芸大学との共催で第15回東京学芸大学ホームカミングデーにおいて、特別講師として北野大氏をお迎えし、辟雍会創立10周年記念特別講演会を行います。講演のタイトルは『「これまで」の教育・これからの教育』。我が家族史から思う個人・家庭・社会』です。

### 3. 学生キャリア支援事業

学生のキャリア支援事業として11月から「企業就職対策講座」の一部として「かち就」を合計10回行います。これは、就職が内定した4年生や卒業生が中心になって3年生に対して企業へ

の就職を希望する学生に就活準備や対策について指導するものです。毎年非常に好評です。また、「かち就」終了後のキャリア支援事業として「ブレイスする」を行う予定でいます。

### 4. 会員支援事業

#### (1) 法律ゼミ

会員支援事業として「法律ゼミ」を10回行なっています。これは、学校で起きる様々な問題に対応するためには実践的な法律の知識が必要との観点から行なっています。A類家庭科卒業生で吉川総合法律事務所所属の弁護士磯崎奈保子先生によるゼミです。

法律ゼミでは今年度末には46回に及ぶゼミの集大成として、磯崎奈保子先生のご指導により法律ゼミ受講生による本の出版の用意をしています。来年度には出版を予定しています。

#### (2) 会員交流プログラム「X(クロス)」

会員同士の交流を促すプログラムとして「X(クロス)」を12月に行う予定です。昨年度の参加者は卒業生、大学生、辟雍会役員の約200人が参加しました。今年も、多くの参加者を予定しています。積極的

に参加をお願いいたします。

#### (3) 現役学生企画による事業への支援

現役学生が企画する事業に支援しています。多くの現役の学生さんの参加者を募集しています。ご応募ください。

### 5. キャンパス環境充実支援事業

東京学芸大学の小金井キャンパスの環境整備と充実を図る事業を支援しています。自然環境に恵まれたキャンパスは学びの園として欠くことの出来ない条件です。卒業生の方には、美しいキャンパスのお越しいただき、散歩を楽しんでいただきたいと思えます。

(事業部長・池田克紀)

## 組織部

組織部は、本年度も組織拡大事業として次における五項目の事業を行っています。

### 1. 支部設立事業

昨年度の山梨県支部、鹿児島県支部の設立を加えて、現在までに、十六の支部が設立されています。本年度は、次の候補となっている熊本、大分、佐賀、宮崎、群馬、京阪奈ブロック(京都、大阪、奈良)、和歌山、兵庫の支部設立に向け活動して

おります。これまでに7月27日(土)に群馬県支部が誕生いたしました。また、中国北京でも設立に向けた準備会が現地で開催されました(会長他三名が参加)。

### 2. 新入生未入会者及び入学時に未加入の卒業生への入会依頼

本年度も、昨年度に引き続き未加入の新入生への入会依頼を行いました。さらに、入学時に入会率が減少し始めた平成22年度未入会生に対して、卒業生となる時期に入会依頼を行う予定です。未加入入生についても、様々な機会を活用して入会を勧め、会員数の増加を図ってまいります。

### 3. 学生委員との交流事業

7月5日(金)に、辟雍会学生委員(各専攻・選修代表)との交流事業として、辟雍会学生委員交流会が開催されました。本会の活動の説明により本会への理解を深め、さらに、会員相互の懇親を深めることができました。今後、本会への学生委員のかかわりを深めて行く方向性が見いだされ、今後の学生委員の活躍に期待がもてる交流事業になりました。事業の内容との関連も含めて、恒常的な交流事業へと発展させていくことができるものと確信いたします。詳細につきましては辟雍会ホーム

ページをご覧ください。

#### 4. 既存支部の総会、会合等への出席

既に17の支部が設立されており、今後、それらの総会・会合等に積極的に参加して参ります。

#### 5. 卒業生への配布物作成

これまで毎年、後学期（本年度からは、秋学期と呼ぶ）の終了時期に、「卒業生・修了生のみなさんへ」というタイトルで、印刷物を配布しています。本年度は、特に、支部組織の紹介と呼び掛けに力を入れて作成し、配布する予定です。

（組織部長・二宮修治）

### 総務部

総務部は次の六項目を柱に、全体的な連絡調整を行っています。

1. 全国代表者会議、理事会、幹事会の開催
2. 東京学芸大学との連絡・調整の実施
3. 既存の卒業生組織等との交流（総会・新年会等）
4. 新規会員の入会手続き及び名簿管理業務
5. 機関誌、予算書、決算書、事業計画等の発送
6. 規則等の整備・見直し

### 広報部

今年度の活動は、

1. 機関誌「辟雍10号」を1万部発行すること、
2. ホームページの管理と充実、
3. 大学行事での広報活動（辟雍会紹介パンフレットの作成）の3点です。

1については会員の増加で発行部数はついに1万という大台に乗りました。また内容は辟雍会設立10周年記念号として充実させました。

2は前年度からずっと引き続いていますが、さらに改良を加えるべく技術的なサポートを得ながら、現在、作業を進めています。とくに今回は大きな節目の年でもあり、思い切った刷新も視野に入れて取り組んでいます。

3は新入生がすぐに親しめるように会の案内をしています。なお、機関誌の作成については経費の面からホームページとの関連で検討するという課題はなお、引き続きです。

### 会計部

会計部は予算案の作成及び執行を中心に次の活動を行っています。

1. 予算の適正かつ効率的な執行
2. 平成25年度予算の計画
3. 的確な会計事務の実施



## 鷺山会長の10周年記念インタビュー

# 学問への憧れ、教育への想い

## ——有馬朗人 元東大総長・文部大臣に聞く——

創立十周年の記念に、会長が元文部大臣の有馬朗人氏を訪ね、インタビューした。ここに採録する。

講演「物理への憧れ——私の  
おいたち——」

鷺山…夏には、東京学芸大学理科教員  
高度支援センター主催で、サイエンス・  
リーダーズ・キャンプを行いました。

「未来を拓く科学の力——理科中核教  
員にいま必要な知識と体験——」  
というテーマで、全国から中学校、高等

学校の理科の先生たちが集まりました。

そこで有馬先生に「物理への憧れ

——私のおいたち——」の記念講演を  
していただきました。大変刺激的なお  
話でした。

有馬…個人的な思い出を語っただけです。

鷺山…先生のお話を聞きながら「自分  
を振り返ることができた」と皆さん言っ  
ていました。「褒めるといことが印象  
に残った。自分は子供たちを的確に叱  
り、褒めていたのだろうか」と反省させ  
られた」など、それぞれの方が実感を

もって自分を振り返るチャンスとなっ  
たようです。

先生は、小学校は茨城県の銚子、神奈  
川県の橋本、そのあとは静岡県浜松、  
中学校は県立浜松第一中学校といういろ  
変わりましたが、それぞれ褒めて下  
さる先生との出会いがあつたですね。

有馬…すべての先生がそうではないけれ  
ども、何人かの先生は褒めてくれました。

鷺山…印象に残つたのは、数学の新しい  
解き方をしたのに先生が理解してくれな  
くて、がっかりしたというお話でした。

有馬…中学校二年の一学期に、二次方  
程式の最大最少を普通のやり方でなく  
微分でやったのですね。学校からの帰り  
道に、雑貨屋のような本屋さんへちょ  
と寄つたら、『考え方』という雑誌があつ  
た。見たら、二次関数の最大最少の議  
論がしてあり、それは、微分をやれば

よいと。そうか！と  
やってみた。中学2  
年でもわかる書き方  
をしていた。それで

やってみたら三次式でも四次式でも微  
分してイコールゼロとすればいい、そのゼ  
ロとなるところが、最大、最少なんだ  
よということも書いてあつた。一学期の  
試験を微分で解いたら、その答えは0  
点で全体75点。がっかりしました。先  
生は何て判らないことをする生徒だと  
思つたんでしょうね。

鷺山…日々伸びて行く子供の水準への  
敏感さが問われます。「生徒の可能性に  
自分が気づいているのか、能力を引き出  
しているか、すごく反省させられた」と  
いう感想もありました。

あの頃の子供って、関心を持つと、あつ  
という間に「豆博士」になる力を持つてい  
ます。誠文堂新光社の科学雑誌をよく読ん  
だといわれましたが、『子供の科学』ですか。



有馬…そうです。今でもありますし、  
銚子の小学三年生のとき初刊号が出て  
すぐ父が買ってくれてからずっと毎月  
とつてくれました。また新光社からは  
「モーターの作り方」、「ラジオの作り方」  
など、いろいろな本が出版されて面白  
かったですね。

鷺山…工作しますと、鮮明に残ってい  
る思い出がありますね。ラジオが鳴っ  
た時とか。

有馬…そうそう。モーターが回った時、  
電池式ラジオが鳴った時、変圧器が  
ちゃんと低い電圧を出した時など。特  
に小学校四年の時にモーター作りで先  
生に褒められて、科学者が技術者にな  
ろうと思つたのです。

鷲山…『子供の科学』もそうですが、ガモフの『不思議な国のトムキンス』や『0123…無限大』とか、あの頃いい本がありました。

有馬…当時は、良い本も悪い本も少なかったことが、良い方向に作用して、良い本だけ残ったのですが、今は逆で、良い本も悪い本もたくさんあって、良い本が目立たないし、競争が激しく少ししか置けなくなつて、良い本も悪い本も自然になくなつてしまう。

そういう意味で、学校の先生方のご努力が大切で、先生方は子供たちの本に目を通され、このクラスにはこの本がいと子供たちも宣伝して、図書館で読むよう指導したり、お父さんお母さんにも宣伝して、買っていただきたいと思えますね。

## 水爆の父・エドワード・テラーと激論

鷲山…「有馬―堀江効果」や「原子核の相互作用するボソン模型」の発見など、先生のお仕事の話は、学問への憧れと情熱をかきたてる大変感銘深いお話でした。

先生はまた、科学の社会的役割も強調さ

れました。お話を聞いて「日々教えていると、科学は平和のためである、社会の福祉のためであるということまで、意識が及ばなくなつてしまふ。社会的責任vということが新鮮で印象に残つた」という感想もありました。

若い頃にアメリカに留学されて、確か「水爆の父」といわれた、エドワード・テラー博士と論争をされたとか。

有馬…「マンハッタン計画」というのがあつて、ナチスに対抗するために原子爆弾を作つたわけですが、私の物理の先生のウイグナーはこれに参加し、原子爆弾をつくつた一人です。プリンストン大学で一年客員教授としてビーグナーの指導を受けたが、もう一人、原子核研究者で水素爆弾を発明したテラーがいて、この二人が仲良かった。二人ともハンガリー系のユダヤ人ですね。ウイグナーのころへよくテラーが来るわけです。

たまたま私は、ベータ崩壊といつて電子と反ニュートリノを出して崩壊する原子核の崩壊の研究をしていました。テラーとガモフもその研究の前駆者でした。

そういうこともあつて、ウイグナーがある日、私の所にわざわざやつて来て、「今日はテラーが来るから一緒に食事

をしよう」ということになった。三人で大学近くのレストランへ行つたわけですが、ここで食事をしながら、私は、「先生方、なんで原子力を原子爆弾にして、広島と長崎に落とされたのですか」と質問をしたことから始まつた。

鷲山…お二人にしてみれば、何だその質問は、ということだつたでしょうね。

有馬…向こうにしてみれば、正義は自分の側にあるということですね。ウイグナーもテラーもユダヤ人だから、ナチスドイツに親族が殺されているわけです。アメリカに亡命して今は平和で暮らしているが、いつ何時、ナチスドイツが原子爆弾を発明してニューヨークを攻撃するか判らない。何とか防がなくてはならないと一生懸命原子爆弾を作つたというわけです。

「そのことは理解した」と言うと、逆に向こうから、「ソ連は日本のすぐそばまで来ている。いつ攻められるかわからない。ハンガリーもソ連にやられた。日本も危ないのだから、なぜアメリカの核のアンブレラの下に入らないのだ」というから、「冗談じゃない。それより先生方は、どうしてあんな爆弾を広島と

長崎に落とされたのがわからない」と言うのと、「日本の戦争をやめさせたかつた」という。

そこで「日本は負けることが決まつていたのでしよう」と追及した。「ドイツは既に降伏していた。ヒトラーも死んでいゝる。ムツソリーニも負けている。原子爆弾を作りそうで怖かつたのは、日本ではなくドイツでしょう。ドイツは既に負けているし、日本も沖縄はアメリカに占領されていた。しかもポツダム宣言の後、なぜ落とす必要があつたのか」。

鷲山…確かにそうですね。

有馬…いろいろな屁理屈を言つていたが、彼らの論理は、日本は強かつたから、戦争を終結させるために落とされたのだということですね。しかし「二つも落とす必要はない」と私は言いました。

二人を相手に三時間ぐらい議論をした。ウイグナーはノーベル賞をもらい、テラーは、アメリカでは神様のような存在である。その二人を相手に38歳の若造が、二時間、三時間も議論を吹っ掛けたので、お店の人にも心配をさせました。

鷲山…率直に質問されたのですね。

財務省の理屈ですね。

有馬…核兵器に反対する人は日本に  
いっぱいいますが、日本の中だけで言っ  
ているのではなく、アメリカ、ロシア、中  
国に行つて、核兵器を作っているところ  
へ行つて言わないと、意味がないし、迫  
力がない。

しかし大学はその逆だよ、と私は言っ  
ている。かつて十八歳人口が二〇〇万  
であったのが、今は減つてはいるが、そ  
の分だけ大学進学率は増えている。平  
成年には四人に一人が進学していた  
が、二十年後の今は二人に一人が進学  
している。そもそも大学の総数が増え  
ています。

科学者はそのくらいのことをやらない  
と。原子爆弾の話をしました、今心  
配しているのは生物兵器です。ウイルス  
なんかは簡単に作れる。猛毒のウイル  
スなどを。IPS細胞は非常にいいんだ  
けれども、逆に人を殺す兵器が作られ  
たら困る。

そういうことを考えたら、大学生に  
関しては、日本の国が出すお金はGDP  
当たり〇・五%では、これはまさに世界  
最低。財務省論理でも学生一人一人に  
対して世界並みと言えない。

科学者がもつと倫理観を持つて、自分  
の国だけを守るといふ倫理だけではだ  
めで、敵も守る。敵も殺さないといふ  
ことを守るぐらいの覚悟でやらないと。

日本の教育費を増やさないと世界に  
後れをとつてしまう。例えばいま教養  
教育が大変重要です。しかし、教養教  
育をやるにも先生を雇うお金がない。

## 高等教育の貧困

有馬…現在、高等教育に出す国のお金

鷲山…日本は税金が安いから受益者負  
担でと財務省は考えている。大学への国  
の財政投与を減らすつとしています。

は日本の場合ひどいものです。小中学  
校の子供に対する教育費はGDPでは  
世界で最低から一番か三番だが、GD  
Pの絶対値が大きいからビリから三番  
ぐらいでも、子供たち一人一人に対し  
ては世界水準に行つている、というのが

有馬…今最大の問題は、大学生の教養  
教育の問題である。そのための予算増  
ですね。もう一つは教育です。理科教  
育にしても極めて不十分で、きちっと  
理科教育をやつていただくためには、特

に教育学部、教員養成大学にお金をだ  
さないといけない。外部資金も一番と  
りにくいところですからね。

教育学部の建物がまず古い。私が文  
部大臣の頃ではなかったかな、教育学  
部の立て直しをせよ、というので施設  
部に発破をかけたのは。

鷲山…文科省の文施設部には学長時  
代によく行きましたが、全国の教育学部  
の施設の状況を実によく知つていまし  
た。よくなつていきます。

有馬…しかしそれは建物ですね。研究  
費や人件費がよくならないと。教育学  
部、教員養成大学に回すことが必要で  
す。運営費交付金の割り当てが増えれ  
ば、人が増えて教養教育も理科教育を  
やつていただける。結局すべての問題は  
その所です。

鷲山…免許更新講習もそうですね。

有馬…自腹で受講料はないですよ。そ  
れに現場で頑張っているのだから、一年  
間ぐらい、もう一回大学で勉強するお  
金を国で出したらどうかと。アメリカ  
はちゃんとそうしています。

鷲山…実施まではいろいろありまし  
たが、大学も頑張つて評判は良かった。こ  
うした講習が大学院の勉強と結びつけば  
いいですね。

有馬…学校の先生は六年制にしないと  
いけません。ただ医者だったら六年やっ  
て経済的なメリットが保証されるから  
いいが、先生は二年余計に勉強するだ  
けになる。

鷲山…出費ですし、それが評価される  
わけでもない。

有馬…四年間は受益者負担でやつて来  
たのだから、あとの二年は国が学費を  
出しなさいと主張しています。日本の  
ために損にはならない。百年たつたら、  
よかつたと必ず思いますよ。

私が敬服するのは、本当に先生方、  
行き届かない環境の中で、難しいん問  
題も抱えながら、よくやつてくださつて  
いることです。少しでもお役に立てばと  
思いますね。

鷲山…日本の教師は世界最高水準を  
行つていましたが、修士化ではヨーロッパ  
に遅れてしまいました。

有馬…小渕内閣のとき、教育改革をしたかったので教育基本法をいじるかどうかの話が出た。私は教育基本法はよくできている、いじる必要はないと言った。しかしもし改正するならば必ず工程表をいれないと駄目だよ、すなわち数値目標を入れてくれと言った。それで文部大臣をやめてしまいました、そこがポイントですね。

鷲山…科学技術基本法はそうなっていますね。

有馬…そう、数値目標で大成功した。一九九〇年頃からの科学研究費が伸びているでしょう。その元となったのが一九九五年の科学技術基本法の成立です。そこに国は基本計画を立てるべしと書いてある。翌年から基本法に基づいて五年毎に基本計画を立て、毎年増えていった。

基本法があるから基本計画ができる。基本計画があるから財務省も文句を言わずにやっている。それで科研費が増えた。

鷲山…人文社会系の充実も必要です。「科学技術基本法」と並んで「学術文化基本法」があればいいと思います。先生の言

われた教養教育もここに関わります。

有馬…あの時に余りに科研費が少ないから、科研費を増やしてくれと、国立私立大学をあげて訴えた結果、科学技術基本法になった。科研費は文系も申請できるようになっています。いくらからお役にたつたと思えますが、おっしゃる通りですね。

鷲山…改正教育基本法には先生のご提案どおり、五年計画の「教育振興基本計画」が入りましたが、財務省は数値をしぶりますね。

有馬…確かに出すお金がない。財務省に対してよく言うのは、お金がないことはよくわかる、消費税のこともありますが、それなら目的税を入れたらどうかと。

教育費のために使う税金です。そうすれば、子を持つている世代も、子どもが大きくなった世代も、おじいさんやばあさんの世代も積極的に考えてくれるだろう。後は政治の問題です。

### ゆとり教育

鷲山…ゆとり教育で学力が低下したと言いますが、どうなのでしょう。

有馬…国立教育政策研究所が、平成十九年、二十年、二十一年、二十二年と国語と数学を調べてみた。それ以前にも五年に一回ぐらい調査していたし、昭和三十九年ごろのデータもある。

共通問題を全部集めて丁寧に分析しますと、一一五題かなんかあつて、七十題ぐらい上がつていて、十五題ぐらいが落ちている。三十題はほとんど変わらない。圧倒的にできるようになっていくのですね。ゆとり教育に入った方がかえって成績が良かった。

ただ、意地の悪い人は、ゆとり教育になつてから、教える量が少なくなつたから集中できるからという説もあるが、いろんな問題を総合的にみますと、国語と数学だけに関しては上がつているし、もちろん昭和の三十七、三十八年に比べると今の方が圧倒的によい。

鷲山…ゆとり教育の目玉の一つは「総合の学習の時間」でした。これは小学校ではよく機能していると思えました。中学や高校では、教科

や専門との関係で、新しい組み立てがなかなか難しかったようです。

有馬…小学校の先生は強いですよ。もともと小学校は総合学習なのですから。

鷲山…体験知や実践知がはいりますから、バーチャルな授業と違い、生きた知識や知恵の習得に繋がつて大変有意義だったと思います。

有馬…私がゆとり教育をなぜ主張したかと言うと、昔は教えることは最低限であった。今はあらゆることを平均して沢山覚えなくてはならない。そこで教えることを減らせと言った。データがあつて、理科の国際比較で小





学校、中学校の時に理科の成績のよい子供たちが大人になって、理科の試験をしたことがある。OECDでやったのですが、子供の頃には一番、二番から五番に入っていた子たちが、大人になるとずっと下になる。

EUの国の人は子供の頃はみんな日本より下で、特にイタリアなんかはるかに下であったが、大人になると日本よりずっと上になるわけである。あんなに教えたのに覚えてないじゃないかと。だから、それよりは本場に必要なの

とだけ教えなさい。そうすると時間がでるでしょ。そこで漢詩から俳句から万葉集まで覚えさせなさい。反復練習も大切です。量は減らして、時間の余裕があるところで、徹底的に基本的なことを繰り返し教えなさいよと。

鷲山…基礎をしつかり身につけよと。

有馬…今でも中学校の国語の先生に感謝しています。終戦直後の教科書に墨ぬりの時代、先生は岩波文庫の『古事記』を持ってきて読むわけです。

「負けたからアメリカイズムが入ってくる。大切なのは神話とか万葉集とか俳句とかだ」と言われて、中学校の三年の時に敗戦後一年半、その先生に教わったことが、今でも役に立っています。

ヤマトタケルミコトはこうだったとか、数行ずつですよ。教科書もない時代でしたから、読んでノートを取らせ、また読む。一時間にやれるのは、五行か六行。半年間かけてやれたのが、出雲神話の一部とヤマトタケルの一部だった。

鷲山…でも、そうやることによって、作品の本質を無意識に子供は感受する。そういう授業だったのでですね。こういうセンスの鍛え方が役に立つのですね。

有馬…そうです。そして二年目は万葉集。長歌と短歌があり、一つをやるのに二時間ぐらいかかる。だから一学期通じたつて五つか六つ習うぐらいである。その次は「奥の細道」。松島までいかにぐらいいました。

こういう学びをしたから、同窓会など年を経て会うと、皆さん卒業後も万葉集読んでみたり、古事記を読んだりしています。

鷲山…心のすごい糧になっている。

有馬…そういう経験もあつて、余計に教えるなど言っている。本質的なことを教える、時間をそんないかにけなくてもいい、繰り返し教えていただければいい、これが私のゆとり教育論なんです。

### 高校卒業認定試験

鷲山…今、高校の時の学びが問題になっていて、高大連携ということもいわれます。

有馬…私は、もともと高等学校の卒業資格をちゃんとやれという考え方です。なぜかという、日本の高等学校教育

のガンは大学入試にある。東大はまだ多数科目だからいい方ですが、一科目か二科目で入る時代で、これが大問題です。数学を入れて欲しいと言ったら、受験生が来なくなるからと言って入れてくれません。

鷲山…高等学校での勉強がおろそかになりますね。私はドイツのアビトゥーアの形が良いと思います。高等学校卒業試験を課して、それを大学入学の条件にする。

それも英数国理社だけでなく、書道も美術も音楽も入れて。書道や美術や音楽は実技ではなく、書道史など歴史の問題でよいと思います。そうしますと全科目をきちつと学べます。高校の先生の間、科目格差もなくなりますし、全体の教養の底上げにもなります。

有馬…おっしゃるとおりです。高等学校卒業資格できちつと認定せよと。勉強のできる生徒は多くの科目を勉強するが、そうでないと一科目しか勉強しない。本当の意味での教育にならない。

鷲山…生涯学習に連なる美術、書道、体育もちゃんと入れないと。

有馬…ですから、全科目を出すと宣言する。大学入試センターを改組して高等学校卒業資格センターに教育改革をする。その辺をやらなければならぬ。美術、書道、体育を入れるのも、私は大賛成ですね。むしろしくないですよ。

鷺山…基本的なことをきちつとする。世界の人と対話するのだから、文科の人も理科の人も、日本史も世界史も特に現代史をしつかり学ぶ。グローバル社会の基本です。

有馬…大賛成です。

## エネルギーの問題

鷺山…エネルギー問題についてお伺いします。福島第一原発の事故以来、エネルギーの在り方が問い直されています。先生は「ゆとり教育でも、原子力の問題でも、私は戦犯扱いでね」などと自らおっしゃっています。

有馬…エネルギー問題では、原子力を使うか使わないかが一番大きな問題になってきていますね。その際に考慮されねばならない本質的なことは、化石燃料はいずれ無くなるということですよ。

産業大革命の直前ぐらゐの頃、ヨーロッパは大変寒くなった。森の木を全部燃やしてして、切る木が無くなったことがあったのです。それで困った時に石炭が見つかった。それで暖房もでき、産業革命まで起った。今それに類することがいづつ起こるかわからないということですよ。

最近アメリカでシェールガスが見つかったことで、これで五十年から百年ぐらゐ天然ガスと石油の寿命が延びたように言われますが、それでも五十年とか百年ですよ。いずれにせよ人類はこの百年で化石燃料がなくなることを覚悟しなければならぬ。自分の代は大丈夫だが、孫やひ孫の代まで考えた時には、どうなるのか。

鷺山…九州や北海道の炭田、秋田や新潟の石油は、私が子どもの頃、日本のエネルギーとしての誇りをもって語られていました。

有馬…でも無くなってしまったでしょ。これが世界中に起こります。かつては、石油が十分でないと言って南方に進出し、石炭をとるために中国に進出せざるを得なかった。それで戦争になった。

そういうことが一つ。

もう一つは、今は日本も、世界も、エネルギーが十分あって、じゃぶじゃぶ使っている。そのエネルギーの使い方を数字的にみますと、一人あたり一年に、石油に換算してアメリカ、カナダが七トン、中国が四トン、EU諸国が四トン、中国がこの十年で一トンから一七トン伸びた。インドが〇・五トン。ところがインドとか中国は、人口がこれから猛然と伸びていく。世界平均が一・八トンですよ。

一〇五〇年にもなれば、世界人口は百億人、日本、EU、アメリカ全部を入れて十億人で、今平均四トン使っているが、先進国以外は一トンも使っていない。向こうは平均一トンも使っていない。ところがいづれそれが同じ四トンのところまで来ます。現在は七十億人ですが、百億人の人が年間四トン使うことになれば三倍のエネルギー需要が生じます。\*脚注参照

人類はやがては、アメリカとは言わなくても日本並みにはしたいと思うでしょう。人類全体が、一人あたり一年間に石油換算にして四トンも使ったとしたら、天然ガスどころではなくなります。

そうすると、再生可能エネルギーを徹底的に伸ばさなくてはならない。ところが、再生可能エネルギーはそれほど簡単ではありません。日本のエネルギー電力を太陽だけでやるとすると、関東平野全部発電機で覆わなくてはならない。風力発電も環境が破壊されるくらい発電機を置かなくてはならない。再生可能エネルギーですべて賄えるかという問題があります。再生可能エネルギーが七十億人、やがて百億人になろうとしている世界の人々全部に行き渡るようにするにはどうしたらいいか。ゴビの砂漠あたりを使えばいいだろうと、いろいろありますが、かえって環境問題とのバランスがあります。

そのことも考えて、要するに、この五十年なり百年長期で考えて人類は、エネルギーをどうするかを真剣に考えないと、我々はいいが、我々の子孫に対して、悪影響を与える。

その時に原子力も一つの方法であるということです。ただし原子力に関して私が一番心配していることは、原子力についてのは、原子爆弾から始まっていて、原子爆弾でバーンと爆発させてしまう

ことばかり考えていたから、後始末の研究を全くしていないということです。私も原子核研究者ですから、これはしまつたと、今文句言っているのですが。

鷲山…原発は、便所のないマンションを作つたと言われますね。後始末を考えなかつたのは、無意識の根拠がそこにあつたのですか。

有馬…原子力の技術は完成していません。使用済み核燃料をどこへ安全に貯蔵するか。半減期が何万年もあるものを長く持っていたら大変だから、短縮する技術もお金がかかるがあるから開発する。地震や津波に対して安全なものを作るということですね。小型の原子炉を作るといふ技術も開発することが必要です。経済効果ではなく、安全な原子力をやりなさいということですね。ウランのかわりにトリウムを使う新しい原子炉の開発も考えねばなりません。もうアメリカと中国で研究が大いに進んでいます。

## 国際的協力体制

鷲山…最大の問題は使用済み核燃料をどうするかですね。そこが解決されれば、問題は少なくなる。

有馬…原子力は、使用済み核燃料の処理ができなかつたら、おやめなさい。できたら、やりなさいということですね。とにかく原子力は、安全性を考え、かつ将来使用済み核燃料が安全に処理できるように総力を挙げて若い人たちは研究すべきである。

来週、中国の皆さんと議論したり、方々で講演しますが、仲良くしようではないかと言っています。仲良くする手段として、使用済み核燃料の処理など共同研究しよう。

尖閣列島問題はあの辺りの海底資源に原因があります。あの辺りは三池炭鉱の延長線の上にあるんですね。石油もあつて。海底にある資源がどの程度中国領にあり、どの程度日本領にあるのかということが最終的な問題として在るのですが、その資源開発の技術を中国と日本が共同研究し仲良くやればいいのです。

鷲山…領土問題は棚上げにして、共同で

管理し開発すべきですね。領土をめぐる争つたり戦争したりするのは、二十世紀までの発想です。二十一世紀の合言葉は、共同でしょう。ナショナリズムはだめでしょう。

有馬…ですからEU諸国は、あのような共同体としてまとまっている。アジアもEU的なことをやらなかつたら、つぶれますね。小を捨てて大同につくであろうではないかと言っています。

中国のエネルギー問題、日本のエネルギー問題ではなくて人類のエネルギー問題を、どうしたら再生可能エネルギーの能力をあげられるか、原子力の安全性を高められるか、そういうことを共同研究して、資源も共同に開発して、海底資源も両方で技術を出し合つてやるのではないか。これは今私が言っていることです。

原子力が今非難を受けているが、原子力はだめだと断定しないで、どう安全性を確保するのか、どう使用済み核燃料をきちつと抑えられるかまずよく検討する。使えるものは使う。本当に再生可能エネルギーが現実的にどこまで使えるのかを冷静に判断して、その

上で原子力の将来も含めてエネルギーの将来を考える。再生可能エネルギーの開発についてドイツに見習つると同時に、二〇〇〇年から二〇一〇年までにドイツが伸ばした再生可能エネルギーによる発電量は二〇一〇年に日本の総発電量の一〇%に達していないという現実も認識すべきです。

その際に環境汚染、環境破壊、二酸化炭素の問題、地球温暖化の問題も冷静に考える。その辺を科学的に技術的に冷静に判断し、そのうえで、やっぱり原子力は無理だつたらやめれば、エネルギーを輸入するのであれば、国際関係をよくすることを今の内からやつておかなければならない。

## 核分裂と核融合

鷲山…核分裂は放射能がでるが、核融合は放射能がでないと聞いたことがあります。核分裂でなく、核融合の研究は進んでいるのでしょうか。

ピキ二環礁の水爆実験で第五福竜丸の被曝がありました。あれは引き金に原子爆弾を使うから放射能が出てしまつたのだ。

有馬…水素がぶつかつてヘリウムになる。それが水素のエネルギーです。完全に

水素が核融合を起こしてヘリウムだけになれば良いのですが、一部三重水素（トリチウム）などになります。この三重水素は放射能を持っていて危ないが、それはウランの核分裂で生じた原子核やウランが中性子を吸ってできる超ウラン原子核などよりはずっと質がよくて、いわば燃やしたあとのごみが少ない。

鷲山…純粋に燃やし尽せないんですね。

有馬…それでも核融合では、現在の核分裂よりはるかに使用済み核燃料の処理が容易になる。ただ注意しなければならぬのは三重水素トリチウムでそれが危ない。放射線を空气中にまき散らします。そういう問題があつてまったく安全とは言えない。

鷲山…太陽は、核融合がたえず起こつていて、あの巨大なエネルギーになるのですね。でも放射能はあまり出てないのですか。

有馬…出ていますが、主としてトリチウムとかエネルギーの高い陽子（水素原子核） $\alpha$ 粒子（ヘリウム原子核）

や電子、そしてガンマしか出ませんから、核分裂のとき生じる放射能を持つ大きな原子核のようなものは出ません。上空には太陽や銀河系の内での核融合反応などで生じた宇宙線（ガンマ光線や陽子線、電子線）がありますから、飛行機に乗ると被曝します。空気中には太陽や銀河系からくる放射線がいっぱいある。エックス線をかけられているようなもので、宇宙船に乗っている人たちはみな防護しています。

鷲山…核分裂や核融合は、地球の生態系とは全く原理の違うものです。もともと地球では手に負えないものだから、核廃棄物は全部ロケットに載せて、太陽に打ち込んでしまえばよいのではと思つたりするのですが。

有馬…今でもその説はあります。安全に打ち込めれば良いのですが。地球上には天然の原子炉があつたのです。外には現れたものとして、今でもアフリカのウラン鉱の鉱山の近くに、太古の原子炉の跡があります。

## 太古の原子炉

鷲山…三十億年前は、地球表面もそうなつていて、放射能が消えたから、今の地球の生態系があるという話を聞きました。

有馬…でも今も、地球の真ん中はマグマで熱い。その熱さを保っているのは。ウランやラジウムとかが $\alpha$ 崩壊 $\beta$ 崩壊を続けて放射線を出しているからで、それがなかつたら、地球は冷えに冷えている筈です。

最近の研究では、四十五億年前に地球ができたころの残熱がかなり残つているとい説もあります。現在の地球の熱の半分はそれで説明できるのですがあとの半分は、マグマの中にあるウランとラジウムなどの放射性物質が壊れて光や熱を出している。それで地球があつたまづっているのです。

鷲山…地球の中は、そつなつて居るのですか。

有馬…我々の足下は、爆発はしないが原子力で温まつている。先程述べたように、地球の表面でも原子炉の跡があります。ウラン $235$ は少量で、あ

とは燃えない $238$ ですが、地球ができたころはウラン $235$ がたくさんあつた。それは自発的に核分裂して、連鎖反応を起こし、アフリカの鉱山には自然の原子炉があつたというデータが残っています。

鷲山…そうすると、太陽に向かつてロケットでうちあげるのではなく、地球で処理が可能かもしれない。

有馬…一つは、原子炉からでてきた高放射能の灰を固めて、ロケットで太陽の中に打ち込んで、太陽に燃やしてもらうというもの。しかし、もう一つは地球には割れ目があつて、それが地震の原因ですが、その割れ目は、ハワイ沖で生まれて海底が少しずつ動き、何千年かたつと日本のそばに来て、深いところで埋まつていく。引き込まれていく。その海底の深いところが深溝になつており、そこに核廃棄物を置いておけば、自然に地球の中に入り込み、マグマに入つていくという考えもあります。

鷲山…そうすると地球を暖める熱になる。放射能も出てこない。

有馬…そのことが一時かなり真面目に

言われて、使われて廃棄物はみんな海底に捨てるというのが今から四十年ぐらいまで世界の通説になっていた。

特に、軽度のお医者さんが使ったアイソトープの処理、これは放射能を持っていきますし、がん治療に使ったコバルトとかをどう捨てるか処理するのに困っていて、それを見んな集めて海底に捨てるというと言われてました。

鷲山：今はどうしているのですか。

有馬：国際的な条約が出来てそれはしてはいけないことになった。それでどうなったかという、皆さんが放射性アイソトープを使った治療を受けたりすると、使用済放射性アイソトープなどを全国的に集めてドラム缶などに閉じ込める。その処理のしようがないので、ドラム缶が何十万本もたまってしまう。東海村や私が勤めているアイソトープ協会の施設などに積んであるのです。

原子炉から出る核分裂破片のように放射能の強いものではないが、一時はこれを海底に放り込んでしまえとドラム缶につめて放り込むつもりが、放り込めなくなったのが何十万本もたまっている。

放射能を帯びた白衣なんかもそこに

ある。やっと一部はそれを燃やして小さくなったものを固めて、地中に埋めて良いことになり、やっとその動きができてきたのです。

### 放射性アイソトープの処理

鷲山：半世紀も放置していたのですか。

有馬：そうです。アイソトープ協会の会長に私が入って、その問題を聞いて「すぐ処理しよう」ということで、やっと東海村の原子力研究機構と、このように話がつきました。うちが預けているのがあったり、向こうが自分自身で持っているものもあります。ともかくアイソトープ協会がお医者さんたちから引き取ったものは責任をもってドラム缶にして東海村へ持って行っている。両方の責任で処理をしています。

長くほったらかしていたので、どちらの責任かなかなか議論がまとまらず、早くやろうと言っていたところに大震災が起こり、やっと動きが出しました。

この問題はどのように処理していますか、原子力発電所から出る大変な量の大きな放射能を帯びている物質をどうするかは大問題です。

鷲山：放射能を無くしていく技術は可能なのでしょうか。

有馬：天然の放射能もありますし、放射性物質を完全に無くするのは不可能です。また医療や工業などで有益な放射能もあります。しかし放射性廃棄物の中にある寿命の長い高いレベルの放射性原子核を寿命の短いレベルの低いにする方法はあります。その研究を二十年ぐらい前からやるやると言っておきながら、ずっとやってきていない。でも、世界的にやっと動きが出てきました。

使用済み核燃料をしまいこむ最終処分場が決まった国は、世界中で現在フィンランドとスウェーデンしかない。危ないものを始末もちゃんとしなければならぬ。原子力は未完成な技術と言われても仕方がない。ある意味では、経済至上主義の問題がありますね。

鷲山：無責任体制がずっとあって、アイソトープを皮切りに、放射線のことでも原子力のことも、先生が全部よい込んで発言されている。

財界はエネルギー供給の効率化と利権

で見識を失い、行政は技術開発や廃棄物処分の道筋をつける努力を全くしなかった。根本的なところで両者とも目利きで、今回の原発事故を迎えてしまったという構図ですね。

有馬：やっぱり、きちっとみんなが事態を認識しなくてはいけない。そのへんが極めて不十分だったと思います。

チェルノブイリの視察もしましたが、放射能の人体への影響については判らないことばかりです。日本では広島・長崎の原爆の影響を調べた放射線影響研究所、特に長瀧重信さん、山下俊一さんの研究が一番しっかりしています。また、アメリカ、フランス、中国、ロシアなどの原子爆弾やチェルノブイリの事故などによる空気中に撒き散らされた放射能については永年、三宅泰雄さんや猿橋勝子さん、そして気象庁の研究があります。今後もっとしっかり研究を進めなければなりません。

### 放射線教育 理科支援教育

鷲山：放射線については、学校給食への不安、農産物の風評被害、瓦礫の受け入れ拒否などの問題が起きています。放

射線について科学的根拠に基づいて正しく判断できる知識を身に着けることが必要です。そこで「放射線に関する教育のための教員支援」という形で文部科学省に研修支援の要求をしてみようと思っております。本学の理科教員高度支援センターが事務局を引き受けて。

有馬：中学校理科の指導要領に放射線ははいったのですが、小学校にははいっていません。理科の先生でも大学で放射線について学んでいないかもしれません。大変なことですので、是非よろしくお願ひしましょう。

鷲山：今日は本学の職員だった井上録郎さんに同行してもらいました。現職の頃から地元の小学校、中学校に協力して、理科教育の素材提供と、生徒の学習支援をずっと続けてきました。

井上：このDVDは、主に生物関係ですが、年間に六千人の子供たちの理科教育支援のためにつくりました。写真一杯の本ですが、私が頑張って撮りました。退職した教員も入っていて、これを使って学校に行って授業をやっています。

ところが小学校の先生たちは、高校や

大学で生物をとっていないのか、コイもフナもわからない。気持ち悪いから触れない。指導する時には、女の先生などは見ているだけなのです。植物連鎖も教えられない。そういう若い先生が最近目につくようになりました。

そういう先生の問題も含め、小学校の二、三年頃から、自然への興味関心をいろいろに高めて、生物、物理、化学へと結びつく関心を定着させたいと思っています。そういう素養の薄さが今小学校にあつて、非常に気になります。

有馬：このように頑張っている人たちへの教育費を教育委員会は計上しないとね。

井上：大方の皆さんは地元の人なので、交通費をくださいという方はいません。自転車で行ける距離ですから。二元教員という人もいっぱいいるわけですので、皆さんにどのような形で働いてもらえるかです。

有馬：その問題ですね。いや立派です。このDVDは、孫に見せて勉強してもらいましょう。

鷲山：今日は、大変興味深いお話しを

伺い、考える素材を沢山いただきました。ありがとうございます。

（二十二年十一月二十一日（水）、

武蔵学園理事長室にて）



# グローバルゼーションと学びの質の転換

——三村明夫中央教育審議会会長に聞く—— 鷺山恭彦 松田恵示 鉄矢悦朗

新日鐵——

## 国際金融資本のただ中で

鷺山…三村さんといえば社長時代に新日本製鐵に対して敵対的買収を仕掛けたアルセロール・ミタルをはね返した熾烈な闘いで有名です。

そのドラマは『敵対的買収を防げ——新日鐵・トップの決断——』として「NHKスペシャル」で放映されましたし、『新日鐵VSミタル』（ダイヤモンド社）という本も読ませていただきました。

三村…状況はちがいますが、依然としてありますよ。国際金融資本の中におかれていますから、優秀な製品

をつくっていけばよいという、これ

までの産業資本の論理では通用しま

せんからね。

鷺山…新日鐵が外国資本の傘下に置かれれば、日本社会に与える影響は測り知れません。その危機を突破され、ものづくり日本の原点と誇りを守られました。

『ローマ人の物語』の塩野七生さんが、三村さんのことを「戦場にいる経営者」と評していたのが大変印象に残っています。

そして新日鐵の会長になられてから、二〇〇九年に中央教育審議会の会長に就任され、今、二期目をつとめておられます。

## 就学前教育・大学教育

### ・グローバル人材

三村…今、三つ問題があつて、まず就学前教育の問題、次に大学教育です。就学前の教育ですが、これに結構お金がかかるでしょう。豊かな家庭とそうでない家庭があつて、小さい時に適切な教育を受けられない子どもが出てしまう。幼児教育は後々まで大きな影響を与えますからね。

それが貧富の差で生ずるのは、まずいということがあります。

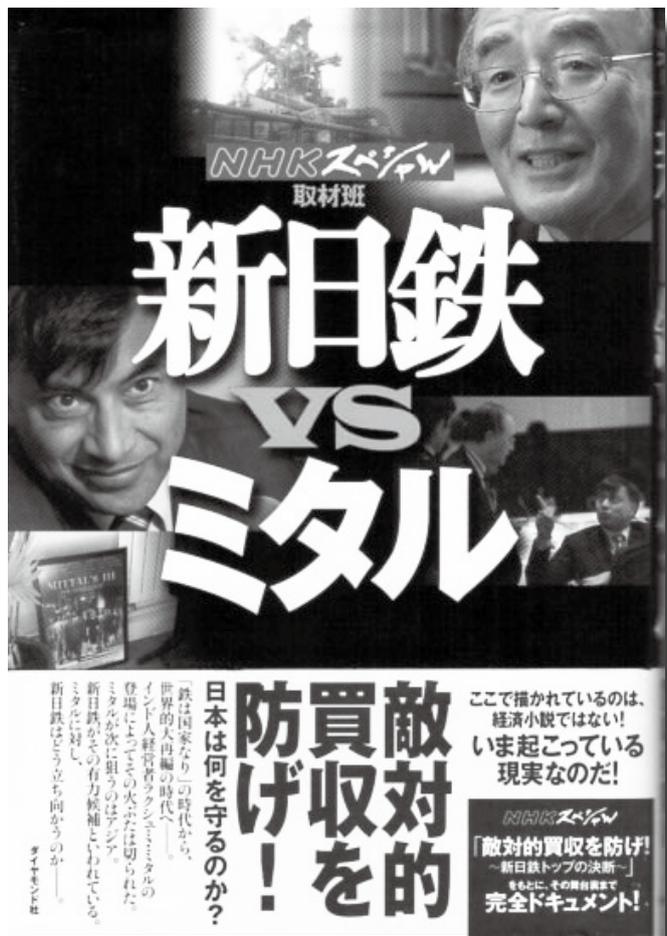
それと大学生が勉強しないという問題です。世界と比べて日本の学生は圧倒的に勉強しない。大学生が勉強しないし、小中学生も、学校の勉強以外にはしない傾向があります。今

回の答申で指摘している点ですね。

鷺山…八月の中教審答申『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて』において、大学の「学修力」について量と質の両面から問題提起されました。

三村…三点目ですが、社会の要請する人材は、環境と共に変わっていく面と、変えるべきでない面との両面





外投資です。成長の場は海外だとい  
うことで、海外に人材を投入し、海  
外の企業を買収し、国内のものを海  
外に移している。

すね。

鷲山…素養が問題だと。

そうしたグローバル化が進  
行している。それは急速で、これに  
対応できる人材を求めているので  
が、基本的な学力に問題があったり、  
技術系でも物理を学んでいない学生  
がいたりして、学生が身につける学  
力・能力がばらばらなんです。

鷲山…基本学力の問題とグローバル  
化に対応する人材ですね。

三村…基本的な学力の問題は、試験  
制度にも問題があると思いますし、  
環境は変化しているのに大学は変化  
していないということもありますね。

卒業して企業に来る学生には、能力  
の点で問題があったり、外国に一度  
も行ったことがない人がいたりとい

ろいろですが、企業に入ればもう無  
手勝流に海外に送ることにしていま  
す。皆さん、立派にがんばってけれ  
ていますよ。ただ、やはり表面的で  
すね。

三村…グローバル人材とは何かとい  
うことですが、違う文化に育った人  
間をしっかりと理解できないといけな  
いし、その中で自分の考えをしま  
り伝えられないといけない。それは  
付け焼刃では駄目で、学生時代に留  
学生と日常的に交流を持ったたり、海  
外から優れた教授が来て指導を受け  
たり、あるいは学生みずから積極的  
に留学したりといういろいろありますね。  
環境は大きく変化しています。それ  
に対して大学は、きちっとした対応  
が出来ていない。自治が与えられて  
いて、学長の裁量でみんなできるこ

ありますが、昨今のグローバルゼー  
ションの中で、変わって行くことが  
絶対に必要なのですね。その課題で  
す。

いろいろ準備するのですが、成長しない  
となると、衰退しなくなる。国も  
同じです。

今、日本の将来に希望が持てないと  
いわれますが、企業は基本的に成長  
しなければなりません。成長しない  
と企業ではない。成長の過程で、世  
界の情勢を分析し、自分たちは何を  
したらいいのか、必要なことをいろ

いろいろ分析しますと、成長の可能  
性のあるところは海外しかない。企  
業は国内にあつて欲しいと強く望ん  
でいますが、しかしここ五、六年、国  
内で成長を望むということが大変難  
しくなり、企業は海外に出て行かざ  
るをいえない。自動車産業も割が海

とに建前はなっているのに、そうでないですね。

## 変化への対応

鷲山…十年前と比べれば、どの大  
学でも留学生は多くなっていますし、  
海外との協定大学も増えて、学生交  
流も研究者交流も盛んです。

ただ、どのようなグローバル人材を  
養成するかという点で、カリキュラ  
ム対応などは弱いと思います。

三村…変化への対応がなかなか出来  
ない点を突き詰めていくと、いろい  
ろな課題が明らかになると思うので  
すが、高校と大学の接続という問題  
がひとつありますね。

最近は高校生も勉強をしない。五、六  
年前と比べても勉強しなくなった。  
これは大学の入試制度の問題かもし  
れない。入試でも必要な科目が少な

くなっているのでしょうか。リベラル  
アーツがあれだけ大事だと言われて  
いるのに、入試制度のところで考え  
ないと、学生は勉強しませんよね。

鷲山…入試勉強の詰め込みがよく非  
難されました。

三村…入学試験の時に勉強したこと  
が、そのまま役に立っているかどう  
かと言えば、それは判りませんよね。  
しかし今となって見ると、知識の基  
本のベースとして役に立っているこ  
とに気がつくわけです。

勉強時間を増やす、大学生の質を向  
上させるとなると、高大接続の在り  
方はどうか、入学試験はこれでいい  
のか、問われます。秋入学などは、  
こうした問題を考えるのにいいきっ  
かけです。  
そして究極的には、学士、修士、博

士の称号を持った学生が、本当にそ  
れに値する卒業生かどうか。大学は、  
社会に対して欠陥品を出しているの  
ではないか、ということですね。  
こう考えると、わかりやすく問題が  
展開できると思うのですよ。

## 財源を見据えつつ、

### 国に任すか、個人に任すか

鷲山…国立大学から国立大学法人に  
なって以降、効率化係数によって大  
学への運営費交付金は年々減少し、  
これまでに東京学芸大学規模の大学  
が五つ程も消えた勘定になります。

時代に即して大学は変らなければなら  
ない面と、教育・研究・社会貢献  
で国際的に打って出なければならな  
いの、国の大学政策はこれで良い  
か、という二つの問題があると感じ  
ています。

三村…教育に対する国の支出をGDP  
Pと対比した時、日本は約三%で、  
OECDの平均5%と比べて低く、  
このうち小中学校の義務教育段階  
では問題ないが、就学前教育と高等  
教育では問題だ、ということが言わ  
れますね。しかし、これはこのこと  
を幾ら言っても日本は動かないん  
ですよ。

なぜなら税金を払う額が少ないので  
すから。国庫に払う税金の一人当た  
りは諸外国に比べて全然少ない。こ  
の問題は深刻ですね。ですから、必  
要なことは個人個人で払うというこ  
とは仕方ないではないかという議論  
になっていく。これはこれで正しい  
議論なのですが、そうなると貧富の  
差が解消されない。  
政策的に国が皆からお金を取って、  
再配分して教育を充実させる方が正  
しいと私も思います。国が運営す

ると、個人に任せてやるのと、この勘案をしっかりとした議論の上に進めない駄目ですね。

鷲山・教育振興基本計画に数値目標を入れる、入れないの議論がありました。

三村・数値目標は書き込みたいとは思っています。社会保障をどうするかといったとき、厚生省では社会保障国民会議をやって、政策として政府の重要項目として位置づけてやっている。教育をどうするか。文科大臣と文科省だけが頑張るといっているのでなくて、政府全体の政策として出さない駄目ですね。

全閣僚が集まって合意してやるのが大事なのです。なぜ、そういうキャンペーンを張ってくれないのですかね。ですから大変動きにくい。

鷲山・国立大学協会や私立大学協会は積極的に動くべきでしょう。「高等教育の危機は社会の危機」といわれますから、国民のために、もって動かないと。

二〇〇八年の『学士力答申』では、大学の教育内容に大胆に踏み込んでいきましたが、今回の『学修力答申』は、データが沢山あり、強い危機感に裏打ちされている割には、遠慮がちな提案になっていますね。

三村・大学は自治権があります。それを尊重した上で、しっかりとやってくれよということですね。学長の方バナンスやイニシヤティブは、またまた学部教授会の自治が強くて、確立していないのではないかと思えます。大学が大きく変わろうとすると、学長がイニシヤティブを取らないと変わりませんからね。

鷲山・教員養成大学の場合は、中教

審査申や文科省の意向を大変真面目に受け止めます。むしろ、あれもやる、これもやるという具合になって、苦しくなる局面があるくらいです。最近では財務省の圧力がいわれます。

教育学部には教員になることを必須としない、国際、表現、環境、芸術といった境界領域の「新課程」があるのですが、財務省は「不要だ、教員養成に純化しろ」と言います。美術、音楽、体育など、小学校・中学校の教員養成課程の他に、ピアノストやデザイナーやスポーツ指導者になっていく課程があった方が、生涯学習社会への人材、学校教育支援の人材になるし、教員になる学生にも専門性の幅と深さを学ぶ場を広げて、絶対に必要なのですが、財務省はそうは考えてくれません。行財政改革からいえば当然の論理なのでしょうけれど。

三村・それこそ、そこは大学の方バナンスの問題でしょう。そういう中で、やはりエリートというか、創造的人材をどう育てるかということが大きな課題だと思いますね。最近ではこのことに抵抗感は少なくなりましたが、明らかに必要です。こういう混乱の時代には、やはり優れた人材がいないと。

## 創造的な人材の育成

三村・それこそ、そこは大学の方バナンスの問題でしょう。そういう中で、やはりエリートというか、創造的人材をどう育てるかということが大きな課題だと思いますね。最近ではこのことに抵抗感は少なくなりませんが、明らかに必要です。こういう混乱の時代には、やはり優れた人材がいないと。

鉄矢・そのためには多様な価値観が前提だと思えます。多様な価値観のある社会から優れた人を生み出し、多様な価値観を理解したエリートをどう育てるかということです。

今は、価値観が均一化した中でエリート、たった一つのピラミッドの頂点のようになっていきます。生きる上での多様な選択肢と、その向こうに続く充実した営みを具体的にイ

メージできるようにしたいものです。ですから学生には「町の人につばい会いなさい。先生になったら、町の人を学校にたくさん引き込みなさい」とよく言います。いろいろな価値観をリアリティーをもって教えな

のビジネスマンを組織するのは大変なのですが、試験を最終的に受けた学生が二百人ほどで、学生も、教える方もみんなとても喜んでいました。産業界は喜んで教育に力を貸したいと思っています。経団連も日本商工会議所も同じように考えていますが、問題はマッチング機能ですね。

三村…その通りです。ですから高校も画一的な価値観ではだめだし、大学もそうです。ただ、高等教育はもの

### 産業界と教育界のマッチング

の凄く力があると思います。それが教育全体に与える力ですね。

驚山…四年前に三村さんとお会いした時に、「企業の人たちは、自分たちの知識や技能を学校や大学に還元し

今、筑波大学から頼まれて三年間の

たくてしようがない。しかし学校現場や大学が積極的でない。もつた

ことが行われているのか、官僚や企業の幹部は何を考えているのか、というテーマですね。

ないことだ」という指摘をされました。そこで私たちの日本教育大学協会に

学内的には、なぜ素人と呼んでやるのかという抵抗もあったと聞いていますし、企画するこちらも、五十人

検討部会を立ち上げて、松田先生に座長になってもらい、小学校・中学校・高等学校で、それが可能になるシス

テムをどう作っていったらいいのか考えてもらいました。

三村…企業の人を登録しておいて、

いつかどこかで必要とされる、という形ではないでしょうか。いつか、どこかでは、全然やる気がしないですよ。はつきりさせないと。居住地のこともありますし。文科省は登録しておいてくれ、ということを言うのですがね。それと違い、日本商

工会議所などは、高校の先生からの要望で動いています。

松田…登録はしたが全然お呼びがか

からないというのは、学校ボランティアも同じです。教育委員会も学校も、登録された人をどう使っていないかわからないのが現状です。

私たちは、教大協で検討した案に沿って一般社団法人『教育支援人認証協

会』を作り、全国展開を始めています。

これは、ボランティアの資質向上を保証し、顔の見えるボランティアとして学校とつなぎ合わせ、人材の活用をしやすいとするシステムです。

それと、企業の皆さんが学校を支援するシステムです。「小学校で貴社のマインドを子ども達に伝えてみませんか？」と呼び掛けて、プログラムの共同開発 活動を実施する社員の研修 小学校へのコーディネート、を展開しています。行った企業も、受け入れた小学校も、共に予想以上の成果を実感しています。

三村…誰か学校で担当する人がいないと難しいですね。筑波大学の場合、大学の先生が二人でコーディネーター役をやっていました。手間がかかりますよ。

松田・・・私たちは二十人規模でやっています。企業の希望と学校の要求とをマッチングさせるわけですから、コーディネートする側の力量も試されます。今後は退職された学校の先生の活躍に期待しています。

三村・・・日本商工会議所は、小中高でやっていますよ。あと最近、早稲田・慶応・東大の大学院生五十人位を対象に「政治を学ぶ塾」を始めています。五十人位の支援団体を作って、私たちが政治リテラシーを教えるのですが、月に一回の割合で、マスコミ界、経済界、官界の皆さんに来ていただいています。本当に手間とお金がかかります。

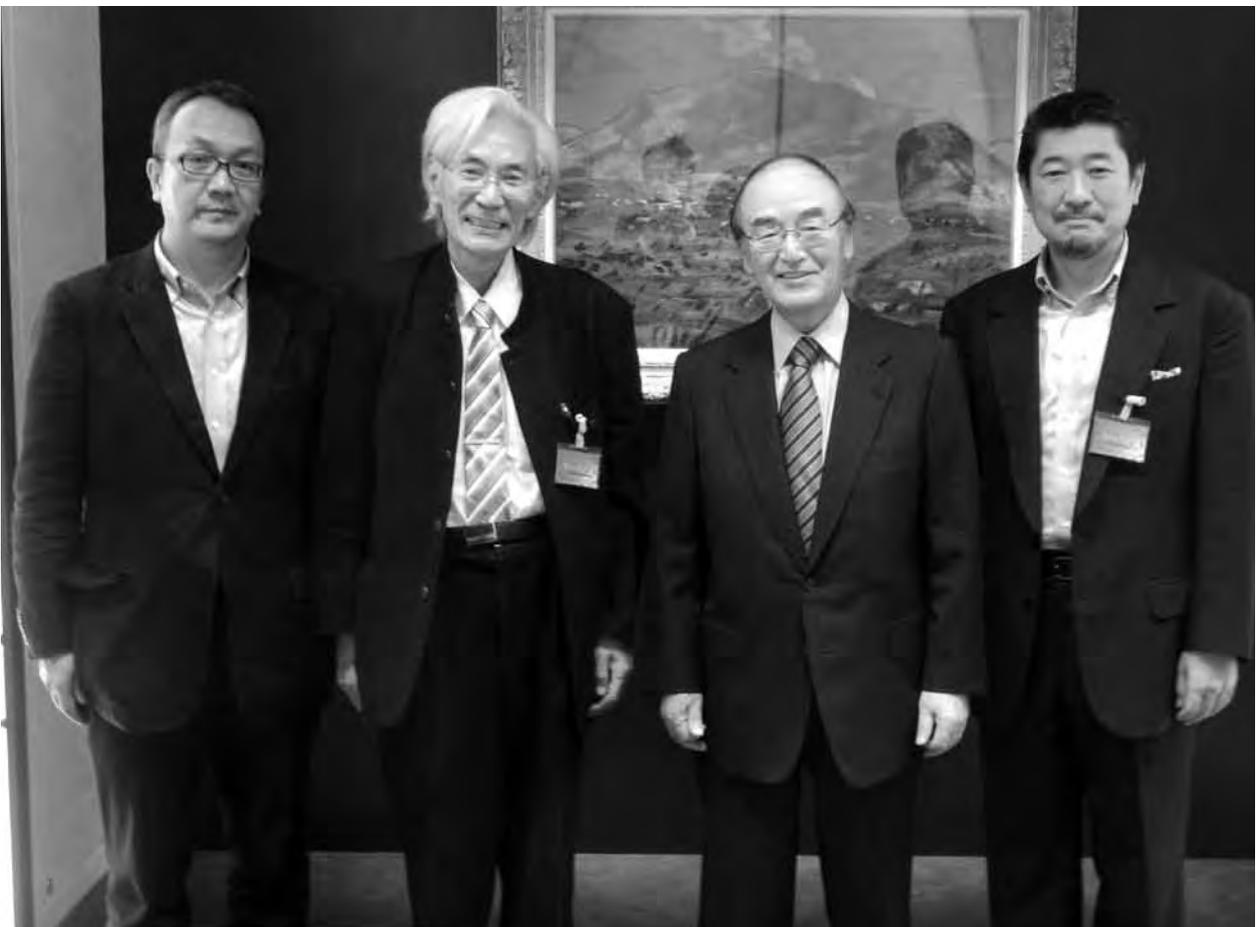
松田・・・小中高の場合、教員がコーディネーターをできればいいのですが、その時間はありません。準教員的な

人を採用して、企業側とチームを組んで、学校の教育全体を見渡しながら、組織的に考えてくれる人を位置づけていかないと難しいと思います。

三村・・・大学だと客員教授という名前です。位置づけられれば、そういう仕事をやりたい人は沢山いると思いますよ。教育に参加したいという気持ちはみんな強いですからね。

勤めが終わって、まさに功成り名遂げた後に、これから自分の人生をどう設計するかというとき、やはり自分のやったことを話したいし、語学だとか、技術だとか、文化とか、それぞれ専門の知識を持って上手に語る人は、いっぱいいるわけですね。若い人への教育はやりがいがありますよ。

いろいろな試みを意欲的にやり始めているというお話で、企業にとつ



て本当にありがたいことです。児童生徒や学生の前で話すことは大切です。講義する時に、最も教育効果があるのは、話す本人なのですよね。

**鉄矢**…凸版印刷株式会社の3年目の社員研修に、我々のプログラムを使ってくださいました。選んだ授業を小学校でやるのですが、引っかけだったり、悩んだり、結構大変なのですが、そういうことがきっかけで社員の間にネットワークが新しくできたりしています。

**三村**…「教育は社会の総力でやる」という言葉はいいのですが、どうしたら実現するかといった途端に難しくなるのですね。やはり、ひとつひとつ成功例を地道に積み上げて、会社や学校に示していくということですね。本来はこうだ、これが正しいといっても進みませんから。

**松田**…学生にも参加させて、企業の開発現場などをみながら、それを学校現場に生かす人たちの努力を見せ、教員養成の力を育てたいと思っています。

**三村**…豊橋技術大学の学長が私の後輩で、頼まれて一年で五人の持ち回りで、もちろん無償ですが講義したことがあり、立命館大学でも同じことをしています。

学生を引き込むと今いわれましたが、人を引き込むのに、いろいろなルートでやっていると感じました。大学はやれることはたくさんあって、それが大学の自治だと思えますね。

### 体験と学びと研修

**松田**…企業も学校も情報を共有し合うことが大切です。触発されるものが凄く大きい。

**三村**…そういう情報は、企業では共有していますね。各企業でどう教育しているかは、経団連では教育部会が把握してやっているし、経済同友会もやっていますよ。

わが社では、工場見学に年間七万人の小中学生が来ます。先生方も来られますが、私たちが一番うれしいのは、工場を見学して先生方が感激して下さることですね。先生が感激すると、それはもう直接に子どもたちに広がるでしょう。先生方にはもっともつと来ていただきたいですね。

**鷲山**…先生がたの研修と子供の体験学習をどう充実させていくかです。

**三村**…我々のところでは、たたら製鉄の実体験というのを小中学生にさせているんですよ。これは人気がありますね。砂鉄に木炭を入れて、ふいごでやって、四時間か五時間かけ

ると、けらが出てきて、それを叩くんですね。

作業は火を扱うことそのものですね。子どもたちは、木炭を一生懸命入れていますよ。実感もある。熱いですね。これは人気のある授業です。こうして砂鉄から刀をつくったわけですからね。その技術は我々のところにしっかり保全されています。

**鉄矢**…これ(左の写真)は「免許更新講習」の授業風景です。新聞紙でこれを作り上げていく。先生になって十年目の皆さんを相手にした授業なのですが、素材の加工する、協力しないと立ち上がらない、クオリティコントロールがしっかりしないと崩れる、崩れてもしつこく直す、すると立ち上がれるように直せる、といった授業です。

ポイントは、子供たちに安心して失敗させる、失敗させることが大事だ

よ、ということを生方にもう一度、十年経って実感として判ってもらおうコンセプトが入っています。

**松田**…大学生もそうですが、中高生も失敗をすることが本当に嫌で、失敗をおそれるんですね。遊びの精神がないし、チャレンジ精神がない。学校文化の悪い所に毒されているので、それに対して大学でチャチャを入れて崩そうとするのですが、外からの評価基準があつたりして、アツケラカンとはやれないところがあります。

**三村**…企業でいいますと、同じ力の人が出た場合、海外留学や失敗経験を持った人がいれば、そちらを採用しますね。そういうメッセージを出せと人事課長に言っています。そういうことを会社、世間、学校、特に学生の両親に対して積極的に発信す

る必要がある。

毎年二百人位採用しているのですが、その内の20%くらいは海外体験のある者です。海外留学、海外に子弟としていた者、青年協力隊などですが、どんどん増えていまして、いいことだからみんなに宣伝しろと言っているのです。秋入学など全然問題ないですよ。年間採用枠というものがあつて、それを動かせばいいのですから。

**鉄矢**…みんなストレートに大学を卒業したがりです。時代が複雑で流動的ですから、学生には試行錯誤が多くあつた方がいいですね。失敗して後戻りしたり、受け直して他の大学へ行ったり、あるいはリカレント教育のような学び直しができる社会になるといいと思っています。

**松田**…中教審答申などのスタンスは



「足りないものを補う」という形ですね。ヴィジョン型というか、オプション型の提案がもっとあつていいと思います。

いただきました。私たちの活動の参考にさせていただきます。ありがとうございました。

◆

**三村**…その辺は考えてみましょう。

(二〇一二年十月二十二日 新日鐵住金本社にて)

**鷺山**…今日は、大変お忙しいなか、貴重な時間をさいて興味深いお話を

# 辟雍会 10年の歩み

## 【設立前史】

- ・1988（平成元）年 東京学芸大学に国際文化教育課程など四つの教養課程が設置され、教員免許取得を卒業要件としないいわゆる「ゼロ免課程」がスタートした。
- ・1996年 東京学芸大学卒業生名簿が発行される。
- ・1999年11月3日 第1回ホームカミングデーが開かれる。記念シンポジウム「日本の教育と東京学芸大学の明日く生きる力を育てる教育」、「大学創立50周年記念・留学生スピーチコンテスト」などが行われる。
- ・2003年5月31日全国卒業生代表者会議開催。11月に全国同窓会（仮称）の設立総会を行うことに決定。
- ・2003年10月2日 幹事会で全国同窓会の名称を「辟雍会」とすることを決議。

## 【2003年（平成15年）】

- ・11月3日 午後2時から芸術館ホールで辟雍会設立総会を開催。岡本靖正学長が「東京学芸大学は6万人の卒業生が集い、一丸となつて新しい歴史を築いていく時代が来た」と挨拶。続く議事で会則などが承認され、荒尾禎秀氏（副学長）を会長に選出した。また副会長には吉野尚也氏（社団法人東京学芸大学同窓会副理事長）、東原昌郎氏（健康ス

ポーツ学科教授）、種市哲氏（青森県同窓会会長）の3人を選び、加藤正克氏（社団法人東京学芸大学同窓会総務部長）ら15人を理事に選出した。幹事長には池田義人氏（数学・情報科学科教授）の就任が決まった。設立記念のパネルディスカッション「これからの大学と教育く卒業生はどう考えるか」、および学芸大の誇るアーティスト、清水和孝（フルート）、小林大作（テノール）、石橋史生（ピアノ）の3氏による演奏会が行われた。

- ・12月7日 支部第1号として辟雍会青森県支部が設立。

## 【2004年（平成16年）】

- ・5月29日 第1回理事会 新入生会員は930人（入学者の79%）との報告があつた。また出版会と共同で「キャンパス周辺散策ガイド」の出版、「岩手子どもたちのチャリティコンサート」の開催などの事業計画が提案され、承認された。また大学との連携で同窓生会館の建設を検討するという計画の提示された。

また、美術科教授・正木賢一氏デザインの新辟雍会ロゴマークが決定した。正木氏によると桜の花びらをモチーフに辟雍が古代中国で5つにわかれた大学であつたということから五弁に白いつぼみを配し、桜色のサーモンピンクをイメージカラーとしたという。

- ・10月30日 第2回理事会および全国代表者会議。その後、ホームカミングデー記念行事として「パネルディスカッション『オリンピックへの道―シドニーからアテネ そして北京へ』」を

開催。パネラーはシドニー五輪自転車代表・森本朱美さん、アテネ五輪ビーチバレー代表・楠原千秋さん、陸上女子800mでインカレ4連覇の西村美樹さん、それにアテネ五輪柔道コーチの射手矢岬助教、ソウル五輪体操団体銅メダル、アテネ五輪コーチの水島宏一助教といった面々。陸上女子800m代表で日本記録保持者の杉森美保さんは、試合の都合で直前に欠席のやむなきに至り、ビデオによる出演となった。

## 【2005年（平成17年）】

・5月28日 第3回理事会 組織部から学生幹事会を組織し、その役員を選出する旨の報告があった。また事業部から大学図書館が塑像する江戸時代の絵双六の復刻出版の計画が提示された。その一環として11月1日、図書館1階の展示スペースで「教育善悪子供双六・絵双六の世界―遊びと学習美―展を共同開催。

- ・7月2日 石川県支部設立。
- ・8月22日 富山県支部設立。
- ・10月1日 岩手県支部設立。
- ・11月3日 磯崎奈保子弁護士による第1回無料法律相談開催。
- ・11月5日 全国代表者会議
- ・第7回ホームカミングデー 辟雍会音楽祭Ⅱ学芸フィルハルモニカ―演奏会―NHK交響楽団ホルン奏者 今井仁志氏を迎えて―を開催。
- ・11月5日 「働くってことをまじめに話してみる会」を主催開催。

・11月23日 武蔵野ふれ愛ラン&ウォーク開催。キャンパス内をめぐるコースで、3キロの部に95人、5キロの部 47人、10キロの部74人の参加があった。

・11月25日 日韓交流伝統音楽祭を後援。芸術館で行われた「韓国伝統遊び歌東京公演と青少年交流」

## 【2006年（平成18年）】

・2月25日 千葉県支部設立。

・3月2日 池田義人幹事長が急逝。

・3月 学生歌「若草燃ゆる」のCD化。学芸大オーケストラ、音楽科と連携。

・4月1日 荒尾禎秀会長の2期目始まる。鳴海多恵子氏が副会長に、池田幹事長の後任に山本一雄氏が幹事長に就任。会の運営事項を決定する運営委員会が創設される。

・5月16日 第4回理事会。個人情報保護に関する規定の制定に関する議論がされ、規定を作ることに決定。

・10月1日 島根県支部設立。

・11月3日 全国代表者会議。

ホームカミングデー共催。記念公演は梶井貢氏Ⅱ昭和43年社会科卒。文部科学省所管 財団法人総合初等教育研究所室長Ⅱ「最近の子どもをめぐる傾向と教育」。

## 【2007年（平成19年）】

- ・1月10日～18日 「縄文の夜神楽―縄文文明写真展」 Ⅱ 滋澤雅人写真展  
特別講演「縄文土器の世界」 木下正史東京学芸大教授を主催
- ・5月9日 理事会
- ・社団法人同窓会と連携してキャリア支援事業として教員採用試験の傾向と対策講座の支援事業開始。

- ・6月24日 高知県支部設立。
- ・9月30日 東原昌郎副会長が家庭の事情で退任。
- ・11月3日 ホームカミングデー 記念講演 宮地忠明国立音楽大学理事  
長・教授（昭和42年社会学科・地理卒 同44年同大学院修了）。
- ・学生歌「若草燃ゆる」制定50周年を記念して、作詞者・山田南海司氏、作曲者・佐久間威氏、編曲者・佐々木徹氏を招いて顕彰。
- ・12月22日 大学体育館などで開催のバレーボール部OB会主催の小中高生バレーボール大会を後援。

## 【2008年（平成20年）】

- ・4月1日 2代目会長の長谷川貞夫氏の体制スタート。副会長は3人から4人体制となり、加藤正克氏（社団法人東京学芸大学同窓会副理事長）、柴田義晴氏（健康スポーツ科学講座教授）、丹伊田敏氏（多摩大学附属聖が丘中学高等学校校長）、山本一雄氏（清水建設）の4氏が就任。幹事長には金子義和氏（三井情報開発）が就任した。

・5月24日 理事会

- ・11月1日 ホームカミングデー 邦楽コンサート 東京学芸大白菊会。  
記念講演 平井聖氏（昭和女子大全学長 江戸時代の建築 史、日本住宅史）「過去の建築から学ぶこと」ピアノコンサート 前田勝則氏（音楽専攻卒 東京芸大大学院修了）。

## 【2009年（平成21年）】

- 東京学芸大学創立60周年
- ・5月23日 理事会
- ・8月1日 北海道支部設立。
- ・10月31日 臨時理事会および全国代表者会議
- ・ホームカミングデー大学創立60周年記念シンポジウム「ものづくりの“ごころ”を子どもたちに」 戸澤忠三ヒノキ工芸代表取締役 キャンパスアドベンチャースクール代表
- ・学生キャリア支援 「WORK語り合い」（在学生が自分を見つめ未来を考える機会として企画）、ImaGaku（先輩と語り合う会）、企業向けキャリア支援セミナー、球員採用試験対策セミナーの講演などを行う。

## 【2010年（平成22年）】

- ・4月1日 鷲山恭彦第3代会長体制スタート。副会長・白木信子（社団法人東京学芸大学同窓会副理事長）、丹伊田敏（多摩大学附属聖ヶ丘中学高等学校校長）、山本一雄（清水建設）、黒石陽子（日本語・日本文学研究講座教授）の各氏。幹事長・金子義和氏（三井情報開発）が就任。

- ・ 5月29日 理事会
- ・ 11月20日 全国代表者会議
- ホームカミングデー 江戸糸あやつり人形「結城座」特別公演
- ・ 12月18日 バレーボール部OB会主催 東京学芸大学バレーボール大会  
兼大野杯を後援

### 【2011年（平成23年）】

- ・ 1月29日 岡山県支部設立
- ・ 2月27日 鳥取県支部設立
- ・ 3月11日 東日本大震災発生
- ・ 3月26日 静岡県支部設立
- ・ 6月11日 理事会
- ・ 現役生、卒業生の初の交流イベント「クロス」を学内で開催。学芸大ストリートダンスサークル出身のパフォーマーダンス集団「リポールFX」などのショーなどで雰囲気盛り上げ、初めての出会いを楽しんだ。
- ・ 8月28日 新潟県支部設立
- ・ 10月30日 広島県支部設立
- ・ 11月5日 全国代表者会議
- ホームカミングデー 講演会「大江戸を語る―江戸の女性と子供たち」  
講師 竹内誠氏（東京教育大学大学院修了 文学博士）
- ・ 11月26日 神奈川県支部設立

### 【2012年（平成24年）】

- ・ 4月1日 鷺山会長の2期目スタート
- ・ 5月26日 第10回理事会
- ・ 7月6日 学生委員との交流事業実施
- ・ 8月17日 山梨県支部設立
- ・ 8月28日 新潟県支部設立
- ・ 10月7日 鹿児島県支部設立
- ・ 11月24日 全国代表者会議
- ホームカミングデー 講演「東日本大震災と防災教育・防災管理」  
講師 矢崎良明氏（学芸大A類理科卒） ミニコンサート 宮澤彩子さん  
（G類音楽卒）

### 【2013年（平成25年）】

- ・ 5月25日 理事会
- ・ 7月27日 群馬県支部設立
- ・ 8月11日 中国・北京で東京学芸大留学同窓生の聚会。鷺山会長出席。
- ・ 11月2日 全国代表者会議 辟雍会（東京学芸大全国同窓会）を「東京学芸大大学同窓会」と名称変更。
- 辟雍会創立十周年記念特別講演会 北野大氏「これまでの教育・これからの教育」〜我が家族史から思う個人・家庭・社会〜  
設立10周年記念パーティ



2013年 第15回 東京学芸大学

# ホームカミングデー

辟雍会創立10周年記念特別講演会

日付:2013年11月2日(土)

時間:16:00~17:30(15:30開場)

場所:東京学芸大学芸術館(学芸の森ホール)



## 講演「これまでの教育・これからの教育」 ～我が家族史から思う個人・家庭・社会～



講師:北野 大氏

【プロフィール】

昭和62年にスタートしたTBS「サンデーモーニング」にコメンテーターとして10年間出演。そのほか「クイズダービー」(TBS)、「くらしの経済」(NHK)、「マジカル頭脳パワー」(NTV)などにもレギュラー出演。以後、様々なメディアで活躍。環境科学の専門家。タレントのビートたけし氏(映画監督 北野武氏)の実兄。

【略歴】

昭和17年5月、東京に4人兄弟の次男として生まれる。  
昭和40年3月、明治大学工学部卒業。  
昭和47年3月、東京都立大学大学院 工学研究科 工業化学専攻博士課程修了。分析化学で博士号を取得。  
(財)化学品検査協会(現:(財)化学物質評価研究機構)企画管理部長、  
明治大学理工学部教授、現職 淑徳大学総合福祉学部教授、  
経済産業省・化学物質審議会委員、環境省・中央環境審議会委員。  
平成16年(社)日本分析化学会・技術功績賞受賞。

主催



国立大学法人 東京学芸大学



東京学芸大学 全国同窓会 辟雍会

へきようかい

お問い合わせ: 辟雍会 042-321-8820 dousou@u-gakugei.ac.jp

## 編集後記

☆…この「辟雍」も号を重ねて10号の節目を迎えました。つまり辟雍会も十年の歴史を刻んだということ。今号の編集基本方針は当然「10周年記念号」ということです。「辟雍会がなぜ設立されたのか」を改めて問うため、設立当初の責任者の方に集まってもらって座談会をしたのも、そうした歴史を振り返る、という思いからです。そして思いがけない話を聞くことができました。

☆…編集に取りかかった頃、七年後の二〇二〇年のオリンピックピックが東京で開催されることに決まったというビッグニュースが飛び込んできました。そこですぐに思い起こされたのが、この「辟雍」創

刊号の編集は、アテネオリンピックの最中に始まったということでした。そしてこのオリンピックに東京学芸大のOGが出場していることもわかりました。杉森美保さんと楠原千秋さんです。二人がアテネから帰るのを待ちかねて京都の杉森さん、松山の楠原さんを訪ねました。この二人が学芸大初めてのオリンピック選手だと思っていたら、その前のシドニー大会に森本朱美さんが出場していることが分かり、急ぎよ鳥取まで伺ったのを思い出しました。さて七年後、学芸大からは何人が東京オリンピックピックに出場するのか楽しみです。

☆…この「辟雍」は、すぐ気付かれると思いますが、右

開き、縦書きで編集しています。第4号からこの形式にこだわっています。そのきっかけの一つに、かつて学芸大の書道科講師をしておられた石川九楊さんの「縦に書け！——横書きが日本人を壊す」（祥伝社新書）に触発されたことがあります。八月、鷺山会長に同行して「中国留学生同窓会」取材に北京に赴きました。私にとっては十五年ぶりの中国でした。それはともかく漢字の国・中国もとくに縦書きはやめてしまっています。この広い世界で文字を縦につづっているのは日本と台湾だけです。貴重な文化遺産だとも思います。日本でも数少なくなつた縦書きの文章を味わっていただきたいと思います。

（遠藤 満雄）

### 辟雍会機関誌「辟雍」第10号

発行日 2013年（平成25年）11月2日

発行責任者 鷺山恭彦

編集 辟雍会広報部

事務所 〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1

東京学芸大学 20周年記念飯島同窓会館内

電話・FAX 042-321-8820

辟雍会ホームページ

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~dousou/>

辟雍会メール [dousou@u-gakugei.ac.jp](mailto:dousou@u-gakugei.ac.jp)

印刷 株式会社 学校写真

〒274-0071 千葉県船橋市習志野4-7-6

電話 047-493-9581

